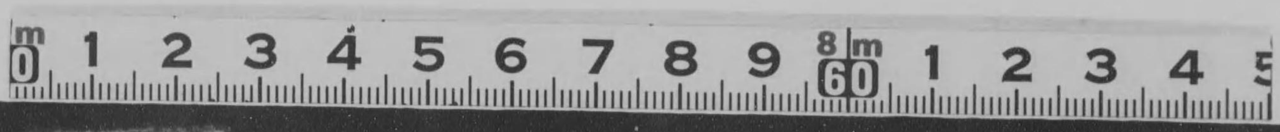
始



386-202

日本經濟研究會著

溜まる極意
儲ける秘訣

財産增殖の秘訣

典隆堂書店發行

大正
9. 1. 28
内交

目次

第壹編　總論……一
地獄の沙汰も金次第
必ず富豪になれる
一寸の呼吸
郵便貯金の大損
金のなる木の種子
第貳編　蓄財法……七
出づるを計れ
吝嗇と儉約の別
時は金なり、これを拾へ

冗費を省け
蟻の一穴
世に棄てるものなし
取扱上の注意
蓄積法の注意

第參編　蓄積の極意……五八

著者の實驗談
勝てばこれ官負くればこれ賊
著者の實驗談
虚飾は女に惚れられぬ
著者の實驗談僅か四十日間に貳拾割以上の利益
勝つて兜の緒を締めよ
農家の蓄財秘法

(イ)大農、中農、小農
貸付肥料と食料米の貸付
貸　金
土地の購入
(ロ)恒産の有無、多少
生活費價値を低下すること
生産費價値を低廉ならしむること
集約栽培をせよ
手間肥料を使用せよ
一反が七八反分に働く
有利作物の選定
社會の風潮に留意せよ
購買販賣に關する注意
(ハ)土地の情況

俸給生活者の蓄財法
勞働生活者の蓄財法
見榮を去れ
天引生活
不定收入者の蓄財法
醫師、辯護士、商人、其他不定收入者の蓄財に付て
大黑柱の保存法

第四編　增植の秘法……一七〇

預金利殖の種類
郵便貯金
銀行預金
定期預金、特別當座預金、當座預金、据置預金

第五編　預金……一八〇

銀行預金の秘法公開
銀行利用
保險
著者の保險に關する意見と活用法

第六編　奇拔なる利殖秘傳……一九二

內職的營業
化粧原料及び化粧品の販賣
書籍及び月おくれ雜誌の販賣
其他の有利商品販賣
株式現物の賣買

財産増殖の秘訣

第一編　總論

ヤレ勞働問題、ヤレ民本主義と大部世の中が騒々敷くなつて來た無産者の叫び、資本家の横暴、中産階級の滅亡などゝいふ文字が盛に使用されて來た。

しかし勞働問題と言ひ、デモクラシーといふも、結局は、「金」といふことに歸着して居る。口には大相イラ相なことを言ふて居るけれども、腹の底は「金」である。「武士は喰はねど高楊枝」などゝいふたのは、生存競爭の激甚でない、呑氣者の丈競べをして居た時代の

金錢の不時活用法
結論

言葉で、今の世の中には通じない。今の世の中は、一も金、二も金金が無くては、何物も得られず、何事も出來ぬ世の中である。

蔬食を食ひ、水を飲みなどゝいつて樂を其中に求めた聖人や、豆腐粕を喰べて道を說へた學者の時代とは、時代が違ふ。金さいあれば馬鹿でも旦那樣。貧乏人では相手にされぬ世の中である。昔は淸貧に安んずなどゝ言つて、貧乏を名譽に心得えた、變人もあつたけれどもこんな變人は今の世には何の役にも立たぬ。何物を措いても金の富みを作らなくては駄目である。

學問をするにも金、名譽を得るにも金、樂みを得るにも金、尊敬されるのも金。羨まれるのも金、金が無くては、渡られぬ世の中で

あるから。金さい有ればこの世は享樂、極樂の淨土あでるが、貧乏では、地獄である。

何人だつて地獄の生活を欲する譯はない。餓鬼道を望むものはない筈だ、一日も一刻も早く悲慘な地獄から脫出して、歡喜の極樂に移住したいのは、同じことである、然らばこの貧乏を脫出するには什麼するか、地獄から極樂にはどんな道を通つて移住するか、この徑捷を公開した千金の文字は即ちこれ本書である。

必ず富豪になれる

世が進步するに隨がつて、生存競爭は益々激甚となり、金錢の貴重なることがシミ〴〵と身に滲みて來る。そこで何人も、この金錢

の増殖といふことを目的として働いてゐる。隨がつて一通りや二通りの方法では金は溜りそうもないことゝなつた。

尤も初めから大資本が有つてのことなら、利益を上げるに左程の困難は要らないけれども、空手空拳では容易に大金儲けは至難である。といふと資本のない人々は失望するか知らないが、事實は確かにそれに違いない。だが待ち給へ、大資本家、大金滿家、大富豪と言はれる人々は大抵一代に作り上げたもので、五百年、千年の永い年月に金を溜めた人はまづ無さ相である。して見ると同じ人間である以上は一代にして、五十萬や百萬の金を溜めることの出來ぬ理由はない。必ず何人にも出來得る筈である。

然り確實に出來る。「加賀樣より河村」と謳はれた。江戸の河村瑞軒は一代であの分限者となつたのである。紀の國屋文左衛門の話はいはずもかな、苟も天下に名をなした富豪は皆一代で作り上げてゐる。岩崎の富も大倉の財産も、皆一代で作つたものである。

最近に於ては、山下龜三郎氏でも、内田信也氏でも、久原房之助氏でも數年乃至十數年の短年月で作つた財産である。金を溜め樣と思つて溜らぬ道理はない、金滿家にならうと思つてなれぬ筈はない必ずなれる、保險附である。

併し前にも言ふた通り世界中の人々が、誰れも彼れも「金」「金」と金に計り蒐つて居るのだから一通りの方法では骨折損の草臥儲け

となる譯である。そこの呼吸が却々六ケ敷い。ウスボンヤリして居ては金はせつせと他人の懐へ藏移えをするから、逃げられぬ樣に工夫せねばならない。

さらば其方法は什麼するか。

（三）一寸の呼吸

昔から「一頭地をぬく」といふて居るが、洵にそうだ、英雄と言ひ、豪傑と稱せられる人でも、格別人間として大差のあつたものではないたゞ僅かに一頭地をぬいた丈けのことである。人間の想像し得ぬ奇藝をしたものではない。矢張り人間のすることを、少し上手に捻り廻すとか、攪き廻すとかしたに過ぎぬのである。

どん栗の丈くらべの世の中に、少し奇拔なことをやつて見給へ、金儲けなどは、滿腹の時に屁をへるよりも容易である。

今は故人となつたが著者の鄕里近くに坂口六兵衛といふ人が有つた。一代にして無一物から數十萬の資產を作り上げた金儲けの達人である。この老人が（其頃は壯年であつたが）が或る年數人の友達と日光見物に出懸けた、その頃は未だ交通機關が今日の樣に開けて居ないので大部分は徒步旅行であつた。とある町に休憩した時、茶屋の店さきにあつた植木鉢の中で面白い草を見付けたので、何といふのかと聞いたら、これは風蘭といふ草で、江戸ではなか〳〵價の高いものだが、日光へ行くと大樹の枝などに澤山ある。しかし老樹

のことだから容易には採ないのでこの邊でも矢張り安くないといふことであつた。

同伴の人々は「成程」と聞いただけであつたが、六兵衛老人はたゞ「成程」では濟まさない。これで一儲ようと考へたのは奇拔なものであつた。老人、日光に到着すると直ちに、彼地此地と山の中を駈け廻つた。駈け廻つた結果は、數十本の風蘭を採集したのである、僅かに二三時間で、採集した。それは丁度數日前に暴風雨が有つて山が荒れて居たからである。この數日前の暴風を、茶店で即座に考へ浮べて、風蘭の採集をしたなどは、奇拔といはねばならぬ。風蘭の五六十株位、格別重い荷物でもない、無事に歸鄕すると、それを

隣り村の名主で、金滿家の某といふ人に持ち込んで二三株賣りつけた。それを、資本にして江戸に出て。老舗の樂隱居や、向島の寮などに賣つて數月にして五六兩の金を儲けたといふことであつた。五六兩と言へば今では、牛肉屋の女中にでも與ふる位の少額である。けれども、其頃の五六兩は實に莫大なものであつた。

なんでもないことの樣であるが、金儲けは、こうした一寸の呼吸にあるもので、この呼吸さい、飲み込んで置けば誰れにも出來るものである。

郵便貯金の大損

世の中には朝から晩まで、眞黑になつて飯食ふ隙も惜んで働いて

居ても金の溜らぬ人もある。然るに毎日、ブラ〳〵遊んで居て金を溜める人もある。さて奇妙なものだこれでは神も佛も有つたものではない。世の中は遊ぶに限ると思はれる樣であるが。これは金儲けの呼吸を知らぬからである。一生懸命働いて、得た金は貯蓄して置きさいすれば、それで金持ちになれると簡單な考へで、稼ぐからである。金といふものは、たゞ働いたから溜るといふものではない百圓の金は何時も百圓の價値のあるものではない。年と共に其價値は下落するものである。然るに人間の勞働には限度がある。如何に大力無雙の男でも、器械の樣に働くことは出來ない、一日に五石も八石も米を搗くことは出來ない、五段歩も七段歩も田植をすること

は出來よう筈がない。限りある力で働いた金を貯蓄して置いた處で限りなく進むこの世の中に處して什麼して金滿家、富豪になり得るものではない。昨日の百圓は今日五十圓の價値となり、今日の五十圓は明日三十圓に下落するこの世の中に、どうして〳〵汗水流した金ばかりで、富豪になり得るものではない、四分八厘の郵便貯金や年利六分か六分五厘の銀行利子などで貯金して置いて什麼して、この物價騰貴の世の中に、金が殖えて行くものではない。

假りに百圓の金を郵便貯金にして置いたとして見給へ、十年後の今日は

一金拾五圓五拾貳錢九厘

となつて居るけれども、十年前の物價と、今日の物價とを比較したなら、三倍、五倍の相違のあるものを、これ計りの僅少な利子を得たのでは、何で利益になるものでない。損も損、大損である。

世に郵便貯金などをすゝめる人の氣が知れぬ。著者はこんな、下手な貯金をせずに、今少し、金儲けの方法を講じたらどうかと思ふといふと遞信省の御役人に御叱りを蒙るか知れぬが、少しく金錢利殖に志あるものは、大抵こんな氣を持つて居ることゝ思ふ。

そこで、資金の活用法なるものが必要となる譯である。この活用法を會得して居ると、こんな頓馬な利殖法はせずに、もつと〳〵健實な方法で、大金が儲かるのである。

金のなる木の種子

何をするにも資本が先である。資本が無くては、何事も出來ない資本といふものは、總べての原動力となるものであるから、資本のない運轉は所詮出來得ぬ譯であるが、著者のいふ資本とは、必ずしも金とは限らない。著者は資本として左のものを擧げて置く。

一、「金」
一、信用
一、勞力

である勿論これは學理的に區別した譯でもなければ、列擧した譯でもない。たゞ記述上の便宜からして、こんな區別をしたのである

ことを斷つて置く。

「金」を資本とする場合には、其多寡によつて、運用、活用の方法を異にせねばならない。一圓の資本で利殖する場合と、百圓の資本を投じて利殖を計る場合とでは大なる相違があるそこで、この資本活用は千差萬別で容易に限りある紙數では書ききれぬけれども、要するに

一、運用を機敏にすること。

一、遊金せしめぬこと。

が其根本をなして居ることを忘れなければよい。

信用を資本として、營利を計るには、

一、正直

一、勤勉

でなくてはならない。誠心がなくてはならない。誠心さいあれば、人は信用する、この信用なる資本は、無限のもので、これ程有利なものはない。著者はこの信用を資本として働く人を眞の人と思ふ。

勞力を資本とする人は、身體の頑健な、意志の強固なものでなくては、駄目である。蒲柳の質の人では勞力を資本として、金の富みを得ることは出來ない。しかし無一物より身を立てようとには、大抵はこの資本を利用する外に道はないのである。併し我國の習慣として兎角この勞働を蔑視する風が有る。勞力を嘲る氣風がある、で

青年時代などには、洋服でも着るとか、洋杖でもついて歩く人が立派に見えて、勞働服、作業服のものを厭ふものが多いのは甚だ殘念の次第である。近來、デモクラシーなどゝ稱する思想が都鄙共に漸く其聲を大にして來たようである。けれども詮じつめて見ると、人々の心の底には矢張り官僚式が瀰蔓つて居る樣である。この官僚式の精神が心の中に潜在して居る時には、什麽しても、勞力は眞に神聖であるとの信念を持つて、これに從事することは出來得ないものである。

其資本が、金、信用、勞力の何れにありとしても、要するに最後の目的は（資本として）現金にあるのであるから、豫定の金額に達

したなら、これを材料として充分増殖の方法を講ぜねばならぬ。これ即ち資本活用法であるが、本書は順序として、この資本を蓄積する方法から述べる豫定である。

以下、金錢蓄積法に付いて、具體的の說明と、實際富豪となれる人々の、實狀とを、遠慮なく、さらけ出して見よう、この方法この呼吸で、やれば必ず、金が溜ること請合である。事實は最大の雄辯である。遲疑する人は金を溜めることの出來ぬ人である。一生を貧乏で通す人である。

第二編　蓄積法

出ずるを計れ

「出ずるを計れ」といふ言葉がある。金を得ることよりも、出すことを先に計算して置くがよいといふ意味である。取ること計り考へても、出ることを知らなくては金は溜らない。

底なし垂杓で水を汲んだ話は小學校の教科書にも出て居るから、何人も周知のことであらう。著者の知人にこんなものがある。

金儲けのなか〳〵上手な男で、空手で毎月二百圓位の金は必ず儲けて居る。これといつて格別まとまつた、營業のある譯ではないが儲けることだけは確實に儲けてゐる。それで何時も金がない、拾錢の錢にも事缺くことが珍らしくない。月收二百圓と言へば、立派な官

員樣の俸給だが、この男には、官吏の樣に、交際費もかゝらず、服裝に費用を要するでもなく、これぞといふて金の出る道も無さ相であるが、それで居て一向金が溜らない。本人もそれを大相不思議に思つて居る。

或る日、著者の宅を訪ふて、四方山の話をして居るうちに、談會々そのことに移つた。

「儀はどう考へても、其理由が分らない。實に不思議で堪らない五十圓か百圓の收入の人々が妻子を擁して生活しながら、幾干づゝでも貯金して行くといふに、僕の樣な獨身ものが、而かも毎月必ず二百圓位は資本要らずに儲けて居て、毎月貧乏して居るのは

不思議だと思ふ」

と熟々貯金の六ヶ敷いことを歎いて居た。で、著者は其時こんなことを言つた」

「なあに君、金を溜めるなんて馬鹿な仕事さ、甘い物を食べて、美しい着物を着て、たまに別嬪と手でも把て散歩したらそれで人間は充分さ、獨身者は獨身者の樣に考へ給へ、金、金といふと首が金になるので金が溜らないのだ、古人曰く、雲に入つて雲を見ず、雲上より出で丶初めて雲を見ると、世の中はそれだよ、金なんといふことを抜きにして、今晩は浩然の氣でも養はうじやないかたまには頭も休憩させてやらなくては馬鹿になるよ」

と云ふと某は、そうだ〳〵、今晩は久しふりで一杯やらう。それが宜い、幸ひ今日は百圓計りあるから、頭の保養のために、一番、景氣よく遊ばうと大賛成であつた、そこで僕、ぢやあ出懸け樣、何處にしようかと出たなら、某は嬉んで其夜百圓を散じたかも知れぬ。否な必ず散じたのである。

毎月千圓の收入があつても、二千圓の收入があつても、かくの如く、出ずるを計ることを知らぬ人には金は溜らぬ。自分の收入を度外視した散財は貧乏の上塗りである。某の金の溜らぬ理由はこゝにあつたのだ、そこで、著者は

君は人に言はれると、直ぐそんな氣になるから、金が溜らぬのだ

君は收入計り計算して、支出を計算して居ないから毎月足らないのだ。今日からは、收入より支出を先に考慮して働き給へ、必ず金は溜る。それでなくては、百年清河を俟つも君には能はざることである。

と言つて序に底なし垂杓の話もしてやつた。其後一年有餘、某は著者の宅を訪ふこともなければたゞ一回の年賀狀の外には音信も無かつたので、什麽したことかと時折り思ひ出しては、嘸今頃また困つて居るだらうなどゝ推察して居た。

處が一年有餘のある日、突然訪ねて來て、

「君に底なし垂杓の話を聞いてから、僕は生れ換つたつもりで、

支出計算を實行した。初めは隨分つらいこともあつた、淋しい樣な感じのすることもあつた、しかし思い切つて斷行した。そのお蔭で今日では兎に角相當の貯蓄が出來たから嬉んでくれ給へ。

といふのであつた。

金を溜める最大の要義は「この出ずるを計れ」といふことにある。

違つた工夫

人として欲のないものは無い、また求めて苦しみをしたいものも無い甘い物を食べて、美くしい着物を着て、樂をして、面白い月日を送りたいのは萬人が萬人皆然りである。誰れ一人として、什麽か苦みたい、悲しい思ひをしたい、什麽したなら、人から馬鹿にされ

るだらう、信用を墮すだらう、何とかして馬鹿にされたい、信用を落したい。苦しみをしたいと願ふものはない。であるから、人並のことをして居ては人並以上の金も溜らなければ、樂も出來ない道理である。何等か異つた工夫をしなくては人から羨望される身分にはなれない、そこがなか〳〵六ヶ敷いことでこれさい出來たなら、必ず金は溜ることに極つて居る。この異つた工夫といふのは別に六ヶ敷いことではない。

節約

といふことである。この節約が出來なくては金は溜らないこと請合である。

漢字で書けば二字、假名で書いても四字、口で言へばたゞ一言であるが、此の節約といふことは、なか〳〵六ヶ敷いことで意志の薄弱な人には出來相で出來ない。容易い樣で容易くないことである。併し實行しようと思つて實行の出來ぬ筈はない。必ず實行の出來得ることである。節約も考へ樣では實に愉快なものである。決して苦痛ばかりのものではない。殊に將來に大なる希望のある節約は更らに一層、愉快である筈である。

著者の鄕里近くに濱野某といふ人があつた、數十萬の資本を數人の愛子に分配して晩年を樂しく送つて十年程前に故人となつたが、この人が無一物から、今日の資産を作り上げたには實に千古の模範

となるべき逸話があるから、次ぎに掲げて諸君の參考に供しよう。

濱野氏が青年時代は見る影もない貧乏百姓であつた、一升の米、一厘の錢にも困つたものであつた相だ、であるから、所詮人並みの生活は出來よう筈がない。けれども人に負けることの厭ひな氏は決してこの貧乏を人にさらけ出しはしなかつた。

田舍のことであるから、三月の節句とか八月の八朔とか、九月の十三夜とかには必ず餅を搗いて祖先にも捧げて神にも奉るものに不文律で極つて居る氏にはこの祭り日に餅を搗くことは甚だ苦痛であつた、砂糖も買はねばならず、豆も使はねばならない、特に餅は其容積が減るので麥飯を食べるよりは多くを用い易い。多く食べるの

は勞力を増運する動力となるから苦痛でないとしても、現金で砂糖を買ふことが貧乏の氏には什那にか苦痛であつたのである。併し負けぎらいの氏は杵の音をさせぬことが出來ない。そこでこの祭り日の朝になると妻に砂糖を買つて來るからと言ひ置いて行つて、裏から鍬とか萬能とかを必ず持つて出た、そして思ひ切つて田畑に出て朝仕事をした、餅の出來る頃、氏はお腹を減して歸つて來て、妻には少許の砂糖の這入つた餅をやるが、自分は決して食べない、鹽餅を食べて嬉んで來た。

座して喰へば風月の蒸菓子も、格別美味を感ずるものではないが汗を流した跡で、空腹に食べる鹽餅の味は千金でも購い難い美味を

有してゐる、氏はこの鹽餅を決して不味と思つて食べたのではない實に〳〵美味であつたのである。働いて利益を得、空腹となつて、美味を食し、一舉兩得、朝仕事をする氏は總べてに對してかくの如く、節約の人であつたのである。農業を以て一代に數拾萬の資産を作り上げた氏の節約は、吾等の把つて以て大に模範とすべきである。

節約は吝嗇と似て非なるものである。他に向つて節約をすれば往〳〵にして吝嗇となることもあるが、内の向つて節儉をするには決して吝嗇とならぬ。たゞ一つ注意すべきは、節約のために身體を害し節約のために、他に迷惑を懸け、節約のために一家の破亂を來すこ

とのない樣に心懸けねばならぬことである。

節約に付いて尙一つの實例を上げて、諸君の參考に供しよう。

著者が曾て歩兵築二聯隊に居た時のことである。千葉縣印旛郡酒々井町附近の山林内で夜間勤務演習をしたことがある。著者は其夜斥候にして、某方面に視察を命ぜられたが、初めての土地であるのと夜間であつた爲めに遂に方向を誤まつて、命令外の地點に出て終つた。其上道を失つて、山傳いに藪の中にたゞ一人暗がりに足先あぶなく進んで行くと、崖から丈餘の下に墜落して終つた。驚いたの驚かないのつて、敵の赤旗より遙かに恐ろしかつたが、幸ひそこは人の住家であつたので、戸を叩いて道を尋ねると内から五十餘りの主

婦らしい人が出て來て道を叮嚀に敎へて呉れた計りでなく角餅の燒いたのを三つと、甘藷の蒸した暖かいのとを呉れた。著者は地獄で佛の諺通り九拜、百拜して其家を辭して歸隊して、級に聞くとこの家は木内某といつて、兵隊さん達が、演習などで行くと必ず何か食物を呉れて庇ふが常である相だつた。今にしてこれを思ふと、内に節約して外に人を慈むこの家の溫い情が、胸にヒシ〳〵と滲み込んで來て十餘年の今日迄尙著者は其恩義を忘れぬ。節約はかくあるべきである。かくしてこそ眞の節約といふことが言ひ得るのである。

重ねていふて置く、節約すると、吝嗇とは大なる相違のあるもの

で、ゆめ〳〵吝嗇に陷らぬ樣、各自注意が肝要である。

毎日拾へ時は金なり

時間即ち無駄な時間を省くといふことは、節約の一種であるけれども、こゝには記述上便宜の爲め、特に區別して擧げることにしたが無駄な時間を省くといふことは廣い意味に於ける節約であると思つて貰ひたい。

穴費といふても、必ずしも金錢ばかりではない。總べての無駄を省くといふことである。

近年我國に於ても、漸く時間の貴重なるを覺つて來て、餘程嚴格になつて來た樣であるけれども、まだ〳〵歐州人の樣に嚴守するも

のがないのは殘念である。元來時間の節約出來ぬ位、各々の生活に大なる錯誤と、不利とを招くものはない、『時は金なりといふ』西諺は何人も周知して居ながら、これを實行して居ない、たま〳〵實行する人はそれが爲めに大なる損失（時間の）を招くのでわれも〳〵と時間を誤まる樣に心懸けて居るらしい。殊に農村の集會などでは殆ど甲合せた樣に時間を間違へて居る。無駄といふものに對して眞先に心得べきことはこの時間の嚴守である。

亦、時間の無駄に付いて一言したいのは、空費するといふことである。前者は多人數集會等の場合を言ふたのであるが、一個人としても、無駄な時間が澤山あるからこれを省くが肝要である。假令ば

仕事中に於ても然りで一鍬耕つては、空を眺め、二鍬には、無駄話をなし、三鍬目には煙草を喫し、四鍬目には、腰を下して一と休みといつた樣に、兎角作業中、無駄に時間を空費することが甚だ多い樣である。これでは晨に星を頂き、夕に月を踏んで歸る迄、田圃に居ても其實、眞の作業時間といふものは半分にも減つて終ふ譯である。

我國の勞働界が近來、歐洲の制度にならつて、八時間制度、六時間制度など、盛んに唱へて居るが、こんな作業で八時間制を施行されては、作業能率が殆ど無くなつて終ふ。歐洲の勞働者は作業中は一秘訣と雖も無駄な時間を費す樣なことは無い相である。吾々も作

業中はかくの如くにして能率を高めたいものである。

これは少しく極端の例だが、茨城縣の多額納税者中の筆頭で一代に百萬の資産を作り上げた宮本某といふ人は、時間を節約する點に於て實に敬服するものであつた、氏は時間といふことを『金錢』以上に尊ばれた。著者は氏から直接聽いたことがある。氏が青年時代田を耕す時は、辨當を最初から腰に下げて耕耘し、隨時に田の中で食時を濟まし、決して食時の爲めに畦畔に腰を下して休むとか、居宅に歸つて喫合するといふ樣なことはしなかつたとのことである一事が萬事かくの如く、無駄な時間を省かれたので、作業能率は實に多大なものであつた相だ。一代にして百萬の富を積み上げた人の

時間の節約は實にかくの如きものである。聞く二宮尊德先生は一日平均四時間以上の睡眠はしなかつたとか。『時は金なり』といふことをよく〳〵味つて貰ひたい。

其他毎日〳〵の動作に付き知らず識らず、時間を空費して居るのは實に夥しいものである。一言か二言で用を辨じ得る場合にも、目的の用事は容易に語らずに世間話に一時間も二時間も費し、歸り際に、一寸一言用事を済まして歸るといふ樣な習慣は農家の現狀に尠くない樣であるがこれは直ちに改革して貰いたいと切望する。でなくては金は溜らぬ。金を溜め樣となれば、是非かゝる時間の空費は省いて、有用に時間を利用して貰いたいのである。

冗費を省け

冗費を省くといふことも節約である。吾々の生活にはこの冗費即ち無駄な費用なるものが甚だ多い。人によつては其大半が冗費である場合も少くない。こんなことでは金は溜らぬ。金を溜めるには無駄な費用は一文も出してはならぬ。併し冗費を省く代りには有用の費用、公益の費用は大に進んで支出するがよい。それとこれとを混同すると、吝嗇となり、無情者となり、人間としての價値を無にするから、注意するがよい。

冗費は其人の生活狀態により、際限がない、また其種類も千差萬別であつて、一一こゝにこれを記述することは出來ないけれども

要するに生活に必要なき費用、交際上却つて不合理なる費用、有益ならざる費用等は總べて冗費である。吾々の生活上から見ると、眞の生活費に比して大抵は冗費が多額の樣である。

人といふものは兎角勝手なもので、自分の都合の宜い解釋を下したがるものである。料理店で酒を飲むのも、交際上止を得ぬからといふ。交際上料理店で飲酒する場合などは實生活の上には殆ど稀な筈である。料理店で高い費用を投ずるよりも家庭に於て主婦の誠意を込めた手料理の方が什那にか相手に好感を與へるものである。然るに人は往々交際だからといふて妓樓に上り、酒亭に飲食するがこれなどは或る稀なる除外例はあるとしても全く冗費に屬すべきもの

である。

冗費中最も恐るべきものは虚榮である。世が好景氣なるに付け都鄙共にこの虚榮が瀰蔓して居る樣であるが、こは洵に寒心に堪えぬ次第である。殊に青年男女の虚榮に到つては歎いても尙餘りあるといふべきである。著者は昨夏數年振りで故郷に歸つた、其時著者の舊友の娘から、三越で明石の柄のよいのを買つて送つて呉れと、依頼された、そこで著者は平常着か外出用かとわざと聞いて見た處が驚いた。日常着だけれども田舍には柄の好いものが無いからお願ひするといふ話であつた。數年前までは、村中を鐘、大鼓で探し廻つた處で、明石の單衣を着る樣なものは一人も無かつたものを

如何に好景氣とは言ひながら、日常着に使用するといふに至つては虚榮なる惡風潮が質朴なる僻遍の地に迄も如何に勢力を逞うして居るかゞ窺はれる。

馬糞を錦繡に包んだ處で千金の價となるものでもなければ、無理算段をして美裝した處で、それが美しいものではない、つゞれを着て居ても懷に巨財を藏してゐた方が遙かに奥床しいものである。勿論強いて卑下する必要はないけれども、身分不相應な美衣、美食は絶對に謹まねばならぬことである。

この他遣問贈答等に於ける冗費を數へ來つたなら、殆ど際限あるまい。余は切にこの冗費を省くことをお勸めする。これ即ち金を溜

ることの第一秘法であるからである。相當の財を蓄い、相當の位置を得たなら、貧窮時代に夢想だになし得ぬ生活が、相當の生活として、また虚榮ならぬ生活として自由になし得るのであるから、資本を作成する間はゆめ〳〵冗費に流るゝようのことのなきことを切望する次第である。古語に曰く、

尺取りの屈するは伸びんが爲めなり

と、今日の破れ衣は明日錦繡と換る前提であると思ふがよい。そうした時に初めて前途の光明が、破れ衣の間に輝いて美しいのである。

蟻の一穴

「蟻の一穴」といふ古語がある。山の樣な大堤塘でも、蟻の一穴から滲透する水の爲めに濕潤されて、遂には崩壞するものであるから小なりと雖も輕ろんじてはならない。大をなすは小が原因であるといふことを戒めた言葉である。こんなことは誰れも承知して居ることであるけれども實際に於ては什麼かといふに、多くの人は承知して居て實行が出來ぬらしい。

一錢はよい、一錢だから何でもない。僅か十錢斗りの錢だもの什麼でもよいといふのが一般の常態であるけれども、この僅少の錢を什麼でもよいと等閑視するのが、甚だよくないことである。古い例だが、富士山も一粒の砂からなり、洋々たる大洋も一滴の水の集ま

つたものである。大をなすは小よりせねばならぬもので、百萬、千萬の巨財も要するに一錢二錢の零碎なる錢の集まりであるのである。

私の友人が先年關西へ旅行した時、いよ〳〵今日限りで旅宿の飯も喰收めだから景氣よく飲まうといふので、一晩とある旅館で飲んだ相だ、醉の元氣で、それ茶代、それ御祝儀と大分奮發をした。處が翌朝になつて支拂に僅か一圓二十錢程の不足が生じた。今更ら一圓斗りの金を借用することも出來ず、さりとて支拂へば、旅費が不足するのでやむなく、其日は一日滯在として電報で東京から金を呼んだ話がある。これが爲めに餘分の費用を拾圓なり拾五圓なり費し

且つ時間を損したなどは、確かに零碎の錢、僅少の錢だらといふ、放亂な遣ひ方をしたからである。

一錢の金でも不足しては百圓に滿たぬ。一厘の錢でも不足しては時に何の役にも立たぬこともある。一錢四厘で葉書を買ふことも出來なければ、六錢五厘でバットを一箱買ふ譯にもいかない。僅少だから、什麽でもよいなどゝいふ考へは絶對にやめなくては駄目だ。

豪放とか、無頓着とかいふことは如何にも豪傑らしい、男子らしい行爲の樣であるけれども、こは甚だ間違つた考へである。膽の大なるは必要であるが、心は少ならねばならぬ。心を少にして各方面に充分の注意を支拂ふ樣でなくては大事業は出來ない。徒らに英雄

や豪傑の傳記などを讀んだ其短所である。豪放、無頓着、磊落などの行爲を眞似てはならぬ、鵜の眞似をする烏は水におぼれる例への通り、無暗に英雄を氣取り、豪傑を眞似るべきではない。

著書の友人に黑瀨某といふ人がある。黑瀨氏の父君は曾つて四國の某地方裁判所長を勤めた人であるが、其母は實に主婦としての龜鑑であつた。母堂は前朝、炊事の時に必ず、一定の米量の中から一握りづゝの白米を別に桶に入れて下女に渡す定めであつた相だ。僅か一握りの白米であるから、五人七人の家族に於ては不足しても、敢えて困る樣のことはない。この別に貯藏する白米は一ヶ年の後には必ず、斗餘の量となつて、お正月の餅の料とするに充分であつ

たとのことである。萬事總べてかくの通りで、人の氣つかぬ零碎のことに氣の附いた人であつたので其教訓を知らず識らず受けた其愛子は何れも注意周到の人材となつたのである。

一粒の粟、一滴の醬油と雖も無駄にせぬ處に金溜の秘訣は存する。のである。百圓、千圓とまとまつた金を支出する時は何人も相當に頭の中で考へるけれども、少許の金額であると兎角考へが疎かになるものであるが、この少許の金錢が轆て巨萬の財産を作る原子であると思つたなら、粗末には出來得ぬであらう、小なる蟻の一穴より大堤の崩るゝを深く考へて、如何なる零碎の金錢でも支出に際しては冷靜なる考へを持つて居て貰いたい。英雄や豪傑を氣取るこ

とはこの際眞平御免を蒙る。

世に棄てるものなし

廢物利用といふ言葉は有るが、世に廢物といふものは無い、たゞ吾々人生に必要なるものと否との區別はあるが、それとて大抵は有用なるものとなつて來て、全く廢物に終るものはまづ絶無といつてもよい位である。併し吾々は未だこれを充分に利用しようとはして居ないけれども、苟も有用なるもの、如何なる細小なるものでも、無駄にしてはならぬ。金を溜めるには、是非共この心得が必要である。

日進月歩の世の中では、昨日の廢棄物も今日は人生の必需品と早

換りをして居るであるから、金を溜めようとなれば、よくよくこの廢棄物を吟味して、全く其用途を見出ださぬ時、初めてこれを廢棄してもよいのである。邪間だとか、見憎いとかいふ漠然たる條件で廢物にして終ふなどはよくない。

それからなるべく廢物を出さぬ樣に心懸けることが先決問題である、元來廢棄物を多く出すといふことは、未だ其利用の全からぬを裏面に語るものであるから、出來得る限り廢物を出さぬ樣に諸事取扱を考へて置くがよい。昔、水戸の義公は奥女中の紙を使用するに甚だ粗亂なるを誡むる爲めに西の内の製紙場を寒風凜々たる中に參觀せしめ且つ誡めて、半紙は三回以上使用することに定めたとの

ことである。明君の事業は達見なものである。公の紙使用法による、と習字せるものは、鼻紙となし、鼻紙となりしものは、干して便所に使用するといふのである。かくの如く一片の紙でも使用の方法に注意したなら、三重四重に利用することは相違であると同時に容易に廃棄物の出來るものではない。

著者、曾つて友人某の來た時、酒席に煮奴（豆腐料理）を出して其全く食し終つた後、水を加へ醤油をさして、吸物となしこれをすゝめたことがある。友人は頗る財産のある、常に美食になれて居るものであつたが、この簡易なる調理法と、廃物の利用に妙を得てゐるに感じて、歸宅後これを家人に語り今日では、豆腐を買ふ度にこ

れを實行して居ると語られた。一寸のことの樣であるが、總べて物は利用して甚だ有益なるものである。

一家の、内臺所や押入れなどを調べて見ると、隨分廃物ならぬ廃物が澤山ある、ことに毎日の料理などに於て甚だしい感じがする。少しの注意さいすれば、勞力さい惜まなければ、立派に有利に有益に使用されるものが廃棄物となつて、世人から顧られずに葬り去られてゐるのは實に殘念である。

廃物を出さぬこと、止むを得ず出來た廃物はなるべく利用することを忘れてはならぬ。

前！藏大臣勝田主計氏の奥樣は侍醫渡邊悌二郎氏の長女である。

この渡邊氏の奥様は非常に謹厳なる人で、子女の教育を下女や書生に任せて置く様な方ではない。自ら範を垂れて教育された方である著者は少年時代親しく其薫陶を受けたものであるが、其頃は廢物利用などといふ言葉もなし、且つ又かゝる上流の家庭に於ては、細少なる廢物などに意を用ふることの殆と全く無い時代であつたけれども奥様は常に吾々に廢物利用の必要を説諭されて一本の糸屑一枚の紙片でも無駄にはさせなかつた。或る時著者は奥様の命令で保存して置いた反古紙を持つて奥様の仰有るまゝ或る紙屋に行つた。すると紙屋の主人は其紙數を數へて、三分の一だけの白紙を余に與へた其時余は始めて、物は粗末にするものではない。叮嚀に保存して置

けば、三分の一だけの價格で購入すると同一の利益のあるものであるといふことを子供心にも泌み〳〵感じたことを今だに忘れない。著者が後年廢物利用に關する相當の智識を持つ様になつたのは、一にこの教訓の賜であつたのである。

苟も一家と名の附く以上は如何に小なる家庭でも、廢物を出さぬ様にするか又は廢物を利用して有益に變換するとしたなれば其利益は少なくも原價の一割乃至二割の利益として計上し得ることは容易であらう。

取扱上の注意

總べて品物を取扱ふには叮重にせねばならぬ。粗暴なる取扱と

叮重なる取扱とでは、其損耗、破損の程度が夥しく相違する。叮重に取扱さいすれば、一生使用しても、破損せぬものでも、粗暴に取扱つたために、只一回にして破損する例などは數へきれぬ程ある、間違ひだから仕方がないとか過失は止むを得ぬとかいふけれども、過失といふものは元來不注意から起るもので用意が不充分であつたからである。充分に用意さいしたなれば、過失などゝいふものは殆ど有るものではないと思ふ。勿論絶對に無いとは言へぬけれども幾分なりとも其損害を輕減することは確實に出來得るものである。

其適例としては比較的安値なもの程、損害、破壞の多いのでも明

らかである、安値であるから壞れ易い、減り易いとのみは言はれない、大部分は粗雜なる取扱から起る損失である。一家の重器とか先祖傳來の貴重品とかいふものは其質が良くなくても、長く保存出來るにも係らず、其他のものが容易に破損して行くのは、確かに這般の消息を遺憾なく裏書したものである。

安値のものであるからといふて、粗雜な取扱をするのは、一錢二錢の端錢だから什麼でもよいといふて、漫費するのと同一である安値のものでも早く破損し、早く損耗せしむれば結局高價なるものとなる。叮嚀に存續してこそ初めて其價は安くなるのである。

併し若し同一種類のもので高値と安値との差異のあるものがあつ

たなら、勿論高價なるを選ぶがよいけれども、高價なるが故に必ずしも品質の優良なるものといふことは出來ない。であるから購入に際しては相當の注意を要することが肝要である。

共同と分擔の注意

以上説明し來つたことは金を溜めるに付いての一般的注意、換言すれば總則であるが、更らにこれを實行するには相當の用意がなくてはならぬ。獨身者であれば、自分で極めたことを自分で實行するに他と何等交渉の必要はないけれども、一家族として種々の性格の異なつたもののある以上は容易に其意見を一致せしむることは出來得ぬものである。

そこで著者はこの實行方法として

一、共同動作

一、分擔動作

の何れにかを決定して實行するがよいと信ずるものである。而して最初は分擔動作を以て、これを實行し、漸く家人のこれに馴れるに隨つて共同動作によるを便とすべきである。

分擔動作をなすに付いては種々異なつた方法がある。而して其方法は家庭の狀態、生活の程度、職業等によつて一定することは出來ないけれども、要するに、

一、有利なる條件を附して置く事。

一、事業に支障なき樣に分擔せしむる事。
一、精神的に動作に就かしむる事。
一、愉快に從事する樣に心懸けしむる事。
一、自發的に從事せるものに對しては特別に有利なる條件を附すること

が肝要である。

例へば、廢物を利用する場合に於て、紙屑、糸屑等の如き座敷上に於けるものは日常座敷の掃除を分擔せる、娘の所得となし、藁細工とか、竹細工とかいふが如きものは男子の分擔となし、臺所一切に關しては主婦其任にあたり、事業より生ずる廢物の利用に關して

は一家屬全體これにあたり勞賃制によるなど其一例である。

要するに最初は其善良なる習慣を作ることを目的とし初めから、これによつて家長の利益をのみ計ることは早計たるを免れないものである。かくして其一家の氣風漸く善良化し、各自から進んでこれに從事する樣になつたなら、漸次其方法を改めて一家の所得となし團欒の內に幾分づゝなりとも多少の貯財をなす樣にするがよいのである。もしそれ分擔法によるも又共同法によるも、其所得を作業者從業者に與へずとも、嬉んでこれを分擔するのであつたなら、それこそ眞に慶福すべきもので、かくあつてこそ、各人の利益は將來に益々發展して行くものである。

共同法による場合は各人の利益を度外に視て、一家擧つて一家の爲めに努力する場合に初めて出來るもので、精神的の基礎によつて、成つたものでなくてはならぬ。

第三編　蓄積の極意

著者の實驗談。勝てばこれ官、負くればこれ賊

前にも度々述べた通り、人並のことをして居たのでは、人並の生活をする外はない、一頭地を抜いた生活をなし、又蓄財もしようとには人並外のことをせねばならぬ。この呼吸が最も肝要である。この蓄積の極意をこれから公開しよう、これは著者の獨創で、且つ著

者自らが實行した實驗談である。一字一句も見逃がすことの無い樣にお願ひする。

正直に告白するが、余は曾つては金錢に淡恬なるべき職業の教育者であつたのである。金錢といふものを或る程度迄は度外視して、教育てう崇高なる天職にあることを內心誇りとも心得、俸給の爲めに云々するなどのことは自ら恥辱と思つて居たのであつたが、或る時義母から乏貧なりとの故を以て殆ど人間として無價値の譏を受けたのが非常に殘念であつたので、即日余は單身上京してこの輕蔑された遺恨を晴らそうとかたく決心したのである。爾來余は獨立獨行、自分の位置の開拓を計つた。上京の當初は或る製糖會

社に職工として就職しようとしたが、職工係の事務員は余の履歴と余の身體とを見交はしながら所詮勞力に堪え兼ねるから斷念するがよいと言つて、採用して呉れなかつた。そしてその事務員の言ふには君の履歴を以てすれば、郷黨の先輩に依頼しても立派な就職口が有るでむらう、何も好んで職工風情になる必要はあるまいと、今度は時に余の前經歴に疑でも措く樣な風であつた。勿論低級なる事務員などの余の心事を忖度するかくあるべきが至當であらう。余は敢えてこれに何等の返答をも與へず、更に其上級の事務員に懇談を申込んだ。そして履歴上職工たるの資格が無いものであれば兎も角、たゞ勞力に堪え兼ぬるだらうの意味で不採用とあつては實に殘

念であるから、何とか確立した理由を示して貰いたいと頼んだ。兎や角の談合の末、余は一時其會社の一職工となつた。石灰の燃燒度を計算する職工となつた、こゝにあること月餘其間一日十二時間宛の勞務を何等苦痛もなく濟ましては下宿の一室に冷い夢を結びつゝくるに一枚の單衣と、一個の帽子とを買ひ得るだけの資力を得た。この着物によつて余はとある會社に事務員として就職した。月俸十四圓で下宿することも出來なければ電車に乗ることも出來なかつたので、余は府下の寓居から二里餘の道を毎日會社に出勤した。朝は遅くも四時には起床して炊事をなし五時半には出勤した。そして夜は大抵九時乃至十時でなくては歸られぬ。夕食を濟まして後、余は

日課として。原稿二十頁（一頁三百字詰）づゝを書くことゝして置いた。余の實際の生活費はこの原稿料が支いで呉れたので會社の月俸は毎月貯蓄することが出來た。かゝる悲慘なる生活を繼續すること三ヶ年、漸く資本が出來たので自ら一會社を創立して、自分は永い經驗上から、最も有利なりと信ずる或る事業を經營したのであるこれが今日迄經來つた余の過去の一班であるが、この際余は次の如き方法を定めて貯蓄をして來た。

附言、（この中には少しく危險性を帶びた節もあるが欺かざる告白なれば共にこゝに記述する。勿論全體が諸君の參考になるものではないが、幾分なりと答することがあれば著者の望みは足るので

ある）

一、職工時代（日給五拾錢）

（イ）一日拾錢以上必ず剩餘すること。

萬一不足を生ずる場合は食料を減ずるか、又は他の方法を以て其翌日中に塡補すること。

但し原稿料はこの中に含まず。

（ロ）食料、宿料は合して一日二十五錢以内とすること。

（ハ）萬一、二十五錢にて不足の場合は一食を減ず。

（ニ）煙草はゴールデンバットとし一日五本以内とす。

（ホ）當分舊友との交際を謝絶し、面會交通等をせざること。

かゝる日常の規則を自ら設けて只管資本の作製を企劃したのである
而して二ヶ月後に於て丁度十圓の貯金を得たので、余はこの資本に
より、前述の通り一枚の單衣と、一個の帽子とを求めて、某會社の
事務員となつたのである、そこで一つ斷つて置くが、余が東京に來
た時の財産といふものは、

一、木綿袷壹枚
一、莫大小襯衣壹枚
一、羽織（木綿）壹枚
一、メリンス風呂敷壹枚
一、縮緬兵兒帶壹本

一、金拾五錢
一、葉書壹枚

であつたのである。而して羽織は作業服を購入する爲めに賣却して
終つた。

右の財産によつて二ヶ月間殆んど不眠不休にて勞働した結局の報
酬が僅かに十圓であつたのである余は熟々金の尊とさを知つた。或
る時は深更、器械の中に立つて、紅蓮の焔を望み、或る時は軒塲を
たゝく雨の音と器械のきしる音とを聞きながら、語らう友もなく徹
夜し、其得る報酬は僅かに五拾錢なるを思ふと余の胸には『金』『金』
と『金』ばかりが胸の關の奥から、湧き出して來て早く金を溜めたい

早く資本家の列に入りたい。早くこの闘の苦痛を脱したいと、ひく〳〵あせる外はなかつたのである。

春宵一刻値千金とかや、然るに余は冷かなること冷獄の如き工場に夜すから、器械と共に器械となつて労働し、汗は流れて眼に入るも拭ふに暇なく、四肢は疲労して一上一下にも疼痛を感ずれども、休憩すること能はず、心は貧苦と戰ふて疲憊其極に達し、營養不良と勞働過度より來れる一種の病魔は幾度か困憊せる金を誘惑して、去れよ、捨てよ、汝は何故なれば當世風に先輩に叩頭せざる。媚びよへつらへよと、勸めた、けれども余は斷じてそれを省けて、二ケ月この勞苦と戰つた。日は一日と時刻の經過する毎に余の心は鐵石

の如く堅かつた。而してそれと共に金の價の如何ばかり尊きものなるかを自覺した。

二ケ月の後、四拾五圓の原稿料と、拾圓の貯金とを資本として、一先づ余の見做はんと欲せる、某會社に這入つたのである。社員の誰れも彼れも異口同音に言つた。君の履歴、君の手腕を以てして月俸十四圓に甘ずるは餘りに意氣地なし、君に相當の位置、相當の月俸を支拂ふことを知らざる重役の下に、君の在るは愚である。と併し余は敢てこれ等の言に耳をかす程、吝氣ではなかつた。自分は什麼かして、この事業、この營業を修得しようと決心して居るので、月俸の十四圓は僕には内心氣の毒の感がした。

或る時、社長は余にこんなことを言ふた、自家廣告をして、無理なる高給を得るよりは、其手腕を認識されて増俸せらるゝが堅實なる方法である。高給を得んとして不安の生活をするよりは、下級に在つて不平を唱ふる時こそ向上の第一歩であると、洵に一面の眞理である。

其後余は間もなく増俸して十六圓となり、次で十八圓となり、一年有餘で三十二圓までを支給さるゝ身分となつた。勿論余はこの月俸を以て生活しようとは思はぬ。勤務の目的は其營業狀態の秘法を修得するにあつたのである。

この會社にあること滿二ヶ年、遂に余は獨立して營業するたけの

餘地を得た。この時に於ける余の財産は、現金六百圓と、信用とであつた。二ヶ年間に六百圓の資本を作る余の苦心は一通りのものでは無かつたのである。而して二ヶ年間に余が冗費なりと信じて支出せる金額は僅かに參拾五錢に過ぎなかつた。即ち活動寫眞二回（この寫眞はトルストイ作の「生ける屍」である、この筋書は余の今日まで經來つたことに酷似してゐるので、二回までこれを見物したのである）と燒團子五錢のみであつた。

余も又同じく人間である以上は時には、高樓酒を呼んで、一夕の歡を擅にしたいこともあつた。せめては牛屋の二階になりとよつて、ロースの一片を喰ふて見たいといふ念慮も有つた。併し上京後

約二ヶ年半、余は一回だにかゝることをしなかつた。資本を得るまでは苦痛を忍ばねばならぬと信じたからである。余の生活は枯木の如く淋しかつた、心は冬枯れの野のそれよりも、荒廢し、枯凋して居た。しかし心の奥の奥には將に來らんとする春光の準備はおさおさ怠らなかつたのである。輝々たる光明は心の奥に充滿して居たのである。

かゝる頃、余が地方に奉職中、親にも優る慈愛を垂れて呉れた赤萩某氏が突然來訪された。余の住居を探索するに容易ならぬ苦心をされたとのことであつた。余は心中潸かに泣いて其慈愛の厚きを謝した。一度志を得たなれば其報恩は必ず忘却せぬと深く〳〵感

謝したのである。

二年有餘は夢の如く去つて、自ら一株式會社に主腦として、自分の抱負を實現し得るまでに到達した。

この間余は次の如き嚴言を自ら設けて、朝夕これが實行を期したのである。

一、金の富みを作れ。

二、誠の道を以て金を作るには何物をも犧牲にせよ。

三、まづ資金五百圓を得よ。

四、極力働け。

五、馬鹿になれ。

六、怜悧に動け。
七、苦痛を喜べ。

の七ケ條であつた。

俸給生活をして資本を得んとせば、四以下七までの心が必要である、働いて損のいく道理はない。必ず自ら得る處のあるものである余の如き自ら進んで他の分擔事務まで手傳つたので、營法の秘訣を早く知ることが出來たのである。與へられたる事務を了すれば、我れ關せずでは所詮營業の内容などを知り得るものではない。

殊に必要なるは馬鹿になることである。半面から見れば意氣地なき樣であるけれども、資金を貯蓄する唯一の要件はこの馬鹿になる

ことである。怜悧振つて人のお先男になるなどは愚の骨頂である。併し動きかつ働く點に於ては智力の限り腦力の極みを盡して、熱心に事務にあたるべきこと、同僚間の交際の如きとは全く反對なるを要するものである。

而して最後に最も肝要なるは、苦痛を忍び、且つこれと戰ひ勝つこれを喜ぶ氣象とならなくては駄目である。

屈するは伸んが爲めなり。然り、今日の屈辱は軈て伸大する前兆であるのである。伸んが爲めの屈辱である。

勝てばこれ官、負ればこれ賊

と言ふ、道にはづれざる限りは何物をも犧牲に供して、勝てよ、世

人の毀譽褒貶など毫も念頭に措くの要なし、勝つものは官ぞ、負けるものは○ぞ。

と毎日これを口誦して居た。

以上は資本を得るまでの僞らざる告白である。資金を得るまでの苦心は何人にも容易の業ではない、しかし心の持ち樣次第で、苦痛の中にも愉快を得て、面白く出來るものである。

著者の實驗談

（虛飾は女に惚れられぬ）

「いつまでも有ると思ふな親と金云々」といふ古歌があるが、資本を調作する間は、金は一文も無いものと心得てゐるがよい。有と思

ふと兎角美いものも食べたいし、美しい着物も買ひたくなる。山桐の下駄よりは、桐柾の下駄を用ふるのが氣持ちの宜いに極つて居る。しかし無ければ一切出來得るものでないが少しでも貯金が出來ると、兎角それを流用したくなるが人情である。著者が某會社に入社後の翌春である。飛鳥山に社員一同の櫻狩りがあつた。勿論費用全體は社費であつたから社員の懷からは一文も出ないのであるけれども、社員連は數日前から準備に忙殺されて事務などは手に付かぬらしい、洋服が什麼だとか、カラーが高いとか低いとか、ネクタイの色が什麼だとか、それでは舊式であるとか、これが流行の柄だとか頭の毛の先端から、足の爪先さまで氣にして居るらしい。

で、時々は余にも相談を持ち込んで來るものがある。その羽織では見憎いとか、その袴はよし給へとか、種々勝手なことを言ふて來る。勿論余としても事情が許すなら、最新流行の洋服に洋杖でもついて出かけたいことは人に言はれる迄もないことだが自分には將來に大なる希望がある。今日數十金を投じて櫻狩りの爲めに洋服を新調する氣にはなれなかつた。

いよ〳〵其日が來た社員は何れも盛裝して來た、中には月給の前借をしたものもあり、洋服屋へ半金入れて新調したものもある。かくして僞はれ紳士は出來上つた。其時余は熟々思つた。苦い無理算段をして洋服を着た處でどれだけ愉快なんだらう、未だ知らぬ、見

たこともない群衆の中に盛裝して出た處で、何が愉快なのであらうそれよりは自分が會社を逐はれても、路頭に迷はぬ方法でも立て置いたなら、安心が出來るだらうがな、戰々競々として日々薄氷を履む樣な思ひをしながら重役の御氣嫌を奉伺して居て、この虛榮を滿足せしむるより、內を充實して置いたなら、美しい洋服を着たより愉快な「安心」が得られ相なものだと。

其後社費で催された帝劇の觀覽會でも、宴會でも、何處に行くにも、この櫻狩り同樣の氣分で余は出懸けた、こゝに一つ面白い挿話がある、これ決して余の自惚れでなければ、惚氣でもない、事實を事實として、さらけ出した迄のことである。

社員一同で府下井の頭公園に遠足を催したことがある、其歸途數人の高級事務員につれられて中野の某旗亭に上つて小宴を催した、其時の余は例の通りの服裝であつたが心中は春の海の樣に洋々として而かも靜なものであつた。酒席に妓が出て、宴酣となると、酒の醉では無さ相な厭味の言葉が社員の口から、次いで出る、余は不興であつたので只一言もこれに返答はせず、大杯を上げて我れ關せず矣をきめ込んでゐると、談はいよいよ露骨になつて余の人身攻擊となつて來た。が余は尙一言もこれに答ふることなく馬耳東風と聞き流してゐたのであつた、處がこれを聞ひて居た妓の一人は甚だこれを不快に感じたものと見えて何呉れとなく、親切にしてくれる

ので、これも地獄に佛の一人かなど内心感謝して居た。余に對する攻擊は漸く盛になると同時に同情した妓に對する攻擊も又盛になつて來た。こうなると妓は意地でも余に同情を深くするのが人情で、座は二派に分れてしまつた、後に聞けば、余が平常餘りに社員間の交際に無頓着でありながら、餘分の仕事までするので重役の覺え頗る斜ならぬを不平に思ひ、一酒樓に誘ふて思ふまゝ攻擊しようとの陰謀であつたのであるそうな、其上其酒席にありて、余に同情した妓は彼れ等の頭目たる或る一人が深く懸想して居たものであるものを、敵たる余に同情したので恨の二乘となつてかくは攻擊の矢を射たのだ相だ。

松崎天民の歌に

名と戀と金と欲りする出か心、
おごれる心、狂へる心。

といふがあるが、戀は美裝で成り立つものではない。眞の戀は心と心と共鳴であると、この時余は思ひ浮べたのであつた。友は其後間もなく會社を去つた。妓は今何處に居るか知らない。共に杳と其音を聞かぬ。

この一事金を溜めることに何等の關係を有つて居らぬけれども、世の青年のともすれば、まつしき戀、一夜の情を得るために、虚僞虚飾にふけることの甚だ其例少なからざるを思ひ、敢て誡めてかゝ

る無謀の擧なからんこと切望する爲めに挿し加へたのである。

虚飾は女に惚れらるゝ所以に非ず、高慢は女に嫌はるゝの原因となる、必ず〳〵慎むべきことである。

余の實驗談

僅か四十日間に貳拾割以上の利益を上ぐ

一定の資本を得るまでは一意專心、其蓄積にのみ努力すればよいけれども、さて其得た金は如何にして一定の額まで保持するか。これは余が金四拾圓（原稿料）を懷中にせる時の第一の難問題であつたこの時余は左記の方法から其一を選定しようとした。

一、郵便貯金

二、銀行特別當座貯金
三、信用貸金
四、株式の購入
五、將來騰貴すべき豫想ある商品の買附

であつた。一二は共に余の欲する處ではない。かゝることは充分資本を有する人のなすべきことで、一日も速かに一定の資金を獲得しようとする時期に於て把るべき策でないと思つた。然らば三乃至五の内より一つを選定するのであるか、三は未だ其知己を得ざるを以て斷念し、三及び五の中より選定せんとし兩三日間、出來得る限りの調査をして、次の如く決定した。

一金四拾圓也　洋紙ザラ紙七連。

而してこれを擔保として、金貳拾八圓を借出し、更らに同一のザラ紙を四連購入し、更らにこれを擔保として、金拾六圓を以て、同一ザラ紙を八連購入の約定をなし受拂期限を契約の日より四十日とし内金として入金して置くことにしたのである。時は大正六年の初夏である、紙價は日々上騰して、契約四十日目には、其當時よりは平均三割弱の狂騰をなしたのである。こゝに於て余は僅かに四十日間に資本金四十圓を以て現金百六拾參圓五拾錢を得たのである。即ち

最初の七連　金五拾四圓參拾錢
次の　四連　金參拾六圓四拾錢

契約中の八連　金七拾貳圓八拾錢
合計金百六拾參圓五拾錢
内、八連代の内未拂金四拾圓也
差引金百貳拾參圓五拾錢

であつた。故に余は四十日間に元金四拾圓に對して八拾參圓五拾錢を利した譯である、尤もこの内利子として貳圓貳拾四錢を支拂つて居るので

差引純益金八拾壹圓貳拾六錢

を儲けたのである。

これ余が金儲けに於ける第一歩であつた。余は爾來かくの如くに

して、利殖の方法を講じて來た。其終に於ては株式の買賣、現物の買賣等もやつた、しかし余は決して投機的の方針で株式や、現物の取引はしなかつたのである。苟も健實なる方法を以て金を溜め樣とには、容易に株式の立會相場などに手を下ずべきものではない。世には、株の賣買程、金の儲かるものは無いといふて、盛んにこの投機熱を昂め樣として、高價な廣告料を惜しげもなく支拂つて、自己を利しようとする好商があるけれども、かゝることは大に考慮すべきことである、決してこれ等の好言に上つてはならない。柳の下に何處も鰌の居るものでもなければ、必ずぬれ手で粟のつかみ取りの出來るものではない、百に一つ位は儲かるか知らないけれども

まづ以て大部分は損をするものと心得たがよい、尤も今日東京や大阪で富豪と稱せらるゝ人々の中には株式で儲けた人が甚だ多い、神田雷藏氏でも、小池國三氏でも皆株式で儲けた人であるけれども、こは株式賣買を專門に行ひ、斯道の達人であつたからである、地方に得て、新聞や雜誌の記事を金科玉條と心得て株式の賣買をしてたまつたものではない。これは後に詳しく述べるが、夢にもかゝる暴擧を敢てしてはならない。

併し余は終に株式にも手を出した、勿論損はしない、確實に儲けた。だが其儲けたは理由のあることで、決して世の普通の人々の株式に手を出した樣なものでなかつたからであることを附言して置く

（詳細は後に述べるとする）

兎に角余は、郵便貯金とか、銀行貯金とかにすることはしなかつた。そして極力利廻りのよい利殖法を講じて來たのである。そこで更らにこのザラ紙で儲けた金を余は一種の奇妙なる運轉法によつて利殖した。

著者の實驗談

（勝つて兜の緒を締よ）

虎穴に入らずんば虎兒を獲ず、で或る程度迄、危險を犯さなくては所詮錄な金儲けは出來ないと決心した中にも余の理性は「マテ暫し、狂ふな暫く」と熱狂せる胸を抑へて、調査に調査を重ねしめ、

これなれば必ず勝算ありと確信して實行した第一着の金儲けは豫想以上の利益を擧げたのであるけれども、余はこゝで亦熟考する必要を認めた。なる程、ザラ紙では利益を得た、今後もザラ紙は必ず騰貴するに相違ない、買へば必ず儲かるに極つて居る、併しまてよ、容易に心を許してはならぬ、勝つて兜の緒を締めることを忘れてはならぬ、曾つて三十七八年の役、出征に際し友の一人が

勇みたつ駒にむち打ちすゝむとも
心の手綱とりなゆるめぞ

と詠んで送つて來たことを思ひ出して、余は資金を折半して一をザラ紙に一を信用貸金にしたのである。これ當時の余としては萬全の

策であつたのである。即ち

一金五拾圓也　信用貸金
但し貸付期限は一ケ月限り
利子、日歩六錢の割

といふことにした。即ち年利二割二分弱に過ぎぬ貸方であるけれども、確實に返濟の見込みが有つたので、この一方法を取つたのである。併し其餘りの拾壹圓五拾錢は、虎穴に入つて虎兒を捕ふべくザラ紙の買入れを斷行した。其方法は前回と用じである。

而して一ケ月後に得た余の純益金は兩方合計して八圓九拾壹錢であつた。かくの如くにして利殖を謀ると共に一方には原稿を書き、

月俸を取り、余の資本は日一日と擴大されて來て、其年末には約貳百圓を算するに至つたのである。

貳百圓の資金を得れば、もう占めたものである、一かどの用途に使用出來る、余はこの資金を以て、翌年よりは更らに一大飛躍を試みたのである。がその方法は第三章の利殖法に於て詳述しよう。

さて金を溜めるといふことに就いて余の實驗上より、更らにこゝに注意すべき事項を擧げ、かつ必ず溜まる秘法をも併せ述べよう。

農家の蓄財秘法

農家に於て蓄財をするには、商人や、俸給生活者と異なる點がある。而して同じく農家といふも、大農、中農、小農と恒産の多少、

有無によりて各異つた方法を取らねばならぬ。また土地の事情によりても其方法を異にすべく、勞力た堪え得る人の多少によりても一定することは不可能である。依つてこゝには

イ、大農、中農、小農
ロ、恒産の有無、多少
ハ、土地の狀況

の三つに區別して詳述するとしよう。

大農、中農、小農

大農、小農等の區別に付いては人各其見解を異にして居るのでこゝに一定義を下すことは出來ないが、余は記述の便宜上次の樣に

區分する。

大農、小作人を使用して生活し得るもの。

中農、少しの資産を有し居るもの。

小農、無資産にして勞力のみにより生活するもの。

數十萬の資産を有するものも、また一、二萬の資産のものも同じく大農である。隨がつて數十萬の資産家と壹二萬の小資産家とでは異なつた方法を取らねばならぬが、要するに農家に於ける健實なる金溜めの方法としては

一、肥料の貸付。

一、食料品の貸付。

一、貸金

等が安全なる方法である。其他遊金があるなれば、土地の購入、植林、株式現物の購入等である。以下これに付いて少しく述べよう。

貸付肥料。

小農者の最く苦痛とするは肥料の購入である、ましてや現今の如く肥料市價の暴騰する時に於ておやで、小農は施肥の必要を認めながら、資金のない爲めに購入が出來ぬとか又は好商の爲めに高率なる利子を支拂つて借入るゝとか、何れも悲慘なる方法を請じてゐるのが普通である、これを救濟するのは大農者の義務で、一村を平和にするの基礎である。そこで、大農者は組合を組織するとか或は、

一個人でなりと其潤澤なる資金を流用して、肥料を安價に購入し、これに相當の利子を付して收穫期迄貸與する方法をとるのである。

これ一面には小作人に對する慈愛であり、一面には自己の所有せる田畑を肥沃ならしめ、且つ確實に小作料を收得し得るの一良法である。而して相當の利益を見るに於ては一舉三德の方法といふべきである。其方法は、

一、小作人に通告し、必要の肥料を申出ださしむること。

二、肥料は直接大問屋や又は製造會社より特約購入すること。出來得れば、數多の大農者協同するか又は無限責任の購買組合を設置するが一層有利である。

三、肥料代には年利一割の利子及び、諸雜費を價格に按分比例して附加すること。

四、收穫期に入りて現金にて返却し能はざるものに對しては收穫物を代納せしむること。

とするのである。かくの如き方法を以てすれば、小作人は確實に市價の二割乃至三割の低廉にて需要し得べく、大農者は、確實に利殖し得て、而かも公益の一助となり、且つ自己の田畑を肥沃にするの有利を得るものである。

食料米の貸付

食料米の貸付は時價によりて、金額に換算し收穫の時に於て米穀

又は、蠧蘭等によりて、支拂はしむる方法である。

この方法は一面甚だ暴利の樣であるけれども、固より困憊を救濟する目的であるから、決しで暴利と稱すべきものではない。此方法によると二重の利を得るものである。即ち、時價による相場に於て相當の收利を上げ、利子を得、且つ收穫物に於て又相當の利益を收め得るものである。

この方法は從來各地で行はれて來て居るけれども、其方法宜しきを得ぬので、兎角の批難を免れなかつたのである。そは即ち利子の比較的高率に基因するからであるが、前にも述べた通り、二重に利益を上げ得るものであるから利子の如きは、やゝ低率にするも、利

益は充分であるものであることを豫め心懸けて實行するがよい。

五圓十圓で財産を取る

貸金に付いては、今更らこゝに記述するまでもあるまい、既に諸君に於て周知のごとゝ信ずるのである。がこゝに少し前法と異つたものがあるから、參考の爲めに記して置かう。

この方法は餘り大資本の人には不似合であるが、小資本の人には至極都合のよい方法である。これは一の納稅機關として行ふものでつまり小農者の爲めに一時、納稅を立換へてやる方法である。殆ど毎日の樣に配達される納稅告知書に對し、期日迄に全部を立換へて納付してやる方法で、小農者にとりては甚だ好都合の機關である、

殊に酒造家等に貸付くる場合は金額も多く、隨がつて金利も大なるもので、頗る好機關とされてゐる。

金利は金高にもよるが、大抵年利に換算して一割八分乃至二割位の樣である、この方法は東京市内等に於ても最も慈善的なる貸金方法として嬉ばれてゐる。

この他貸金に付いては種々の方法があつて一定出來ないが著者は貸金に對してこんな信條を持つて居る。

一、貸金は無いものと思つて、なるべく永い据置き方法を取ること。

一、少額の場合は別として、其他は不動産を抵當となすこと。

一、農村に於ける貸金は決して、動産を擔保として貸付けぬこと。

である。前にも述べた茨城縣の多額納税者宮本某氏が、財産を作る方法として、次の樣なことをされた相である、大に參考になることであらう。

氏は五圓、拾圓の資金を漸く得る樣になつた時、隣村の名主某といふ資産家に赴き、低利で預かつて呉れと依頼した、某は其心懇けを嬉んで快くこれを引受けて呉れたので、氏は五圓、拾圓、貳拾圓と收入の度毎に持參して通帳に捺印して貰つて置き、年末に計算して證書に書換へたが。斯すること二三年にして金額は漸く多大となり、年末金融の切迫なる時などには一寸支拂に困るだけの金額と

なつた、こうなつては却つて某より氏に依賴して延期を乞ふといふ反對の現象を呈して來た、氏は嬉んでこれに應じ毎年々々年末には利子を加算して證書の書換をなし、遂に十二三年にして、さしも近郷に鳴り渡つた某の財産も零碎なる五兩、十兩の少額なる金の累計によつて宮本氏の手に全部を引渡すの憂目に遇つたのである。貸金の秘訣はこゝにある。少を積んで大をなすことを忘れぬ樣にせねばならぬ、證書の書換を忘れぬ樣に、抵當物に對する監視を充分にして、出來得る限り、多額の流融をする樣になし、決して他人の手に二番、三番等の抵當權を渡さぬ樣にするがよい。殊に地價の如き年々歲々騰貴して低落の危險全くなきものであるから、現在に於ては

利子と合算して少しは無理と想ふ程度迄も、貸付ける位の覺悟を持たねば駄目である。

土地の購入

佛蘭西は例外として其他の國では人間が毎年增加して居る。殊に我國の如は毎年二十萬以上の增加を示してゐる。この率で進んで行くと人間の肩と肩とが摺れ合ふ樣になるかも知れない。などゝ戯談を言ふて居る人もあるが、戯談は戯談でも人口の增加することだけは確實である。

人口は增加するが、土地は人口の樣に擴大されては行かない。我國に於ては幸ひに、二十七八年役で臺灣を得三十七八年役で樺太の

南半、關東州の租借權を得、其後朝鮮を合併し、滿蒙を勢力權内に入れ近くは日獨戰爭によつて南洋の群島を領有したけれども、とてもこれ位の土地を得ただけでは年々增加する人に對して充分なる譯にはいかない、論より證據、毎年毎年主食料たる米の不足は天井知らずの狂騰を示して居るではないか。

人口の增加に比例して增加するものは、住居の土地、食料を得る耕地である。土地が逐年暴騰して其底止する處を知らぬのは這般の理由が主因をなして居るのである。故にこの際、土地を購入して置くことは金を溜める、又利殖の方法として最も堅固なる一方法である。(詳細は利殖法の條に明なり、)

其他、殖林、株式現物の賣買等共に有利なる方法であるがこれ等は共に利殖法の條に敢て詳述することゝして次には(ロ)に屬する農家の蓄積法を述べよう。

恒産の有無、多少。

恒産の有無、多少によつて金錢蓄積の方法を異にすべきことは既に前述の通りであるがこゝには、中農階級の農家に於ける方法を述べよう。

余のいふ中農とは自給自活の農家又は半ば自己の不動産と半ば小作とをする農家とをいふのである。

自分の土地を所有し、これより得る收入で生活する農家は最も平

温なる生活であるけれども、かくては萬一の時に處する場合に支障のなきを保し難く、又人間として自給自活、塵香もえでず屁もひらずでは生活甲斐のないことで、少しは生活の價値を向上して、資産家とか素封家とか言はれ、時には、美味も々々し、旅行もして見たい。なるべくは立派な人々との交際もして見たいといふのは人情の常である。そこでこの中農者の生活にも金錢利殖の必要が有るのである。

中農者のとるべき蓄積法としては。

一、生活費價値を低下すること。

二、生産費價値を低廉ならしむること。

三、有利なる作物の選定

四、社會の風潮に留意すること。

五、購買、販賣に關する注意。

が肝要である。

以下これに付いて具體的の説明を試みよう。

生活費價値を低下すること。

先づ生活費價値といふことを述べて置かう。

生活費價値といふのは、生活に要する費用全部を通算して、一家庭内の人數に分配した平均の生活費用をいふのである。五歳の小兒、と、四十歳の家長との費用は當然相違のあるもので、これ等を平均

した費用を稱して生活費價値と稱するのである。

中農階級に於て、最も目下急務とすべきはこの生活費價値を低下することである。勿論生活を低下して、食料を減じ、不味に我慢し家屋を矮小にせよなどゝいふのではない。要は、合理的に生活して現在より以上に美味、滋養分を食し、現在以上に清淨なる衣類を着し、現在以上に高尚なる生活をしつゝ低下せよとの謂である。かく言へば所詮出來得ぬ無理を強いる樣に見るか知らぬけれども、決して無理でもなければ、出來得ぬことでもないのだから奇妙だ。

今日我國農家の生活狀態を見ると、甚だ不合理なる生活を營むで居る樣である。一例を食料に取つて見るに、

一、蔬菜の使用甚だ粗放である。

一、米、麥等の取扱甚だ不取締である。

一、合理的に調味されて居らぬ。

一、自家の收穫品に對しては價値を認めざるが如き感あり。

の如き實狀を示して居ると思ふ。

蔬菜の如き近年著しき暴騰を來し居るにも係らず、農家のこれを使用するや甚だ粗放であつて、都市生活者の臺所とこれを比較するに於ては全く崩壞の差異ありと稱すべきである。勿論勞力の大なる農家に要求するに少量の食料を以てせよとは迫らぬけれども、この粗暴なる取扱を尙少しく注意したなれば、其需要は二三割を減

ずること確實であると信ずるのである。この粗暴なる取扱はたゞに蔬菜のみに止まらず、高價なる米、麥に於ても又然るを見るのである。毎年何千石を收穫する農家に於ては一粒の米、一握の麥は物の數ならぬかは知らぬけれども、一粒の米も軽ては一升一斗の大量となる素質を持つて居るのである。決して粗雜なる取扱をすべきでない。

都市生活者が一粒の米をも臺所の流し板より拾ひ上げ、數粒の飯をも小皿に盛つて乾飯となし居るを見ば、農家も少しくこれに見徹ふ必要があらう。

兎に角この粗放なる取扱による一ケ年の損害は決して僅少のも

のではあるまい。假りに毎日朝夕二回宛、飯を炊すとして一回十粒宛を流失するとせば、一ケ年に捨つる米粒は七千三百粒で、毎日飯櫃の中から捨つる飯粒の數を五十粒とすれば、一萬八千二百五十粒を一ケ年に捨つる譯となる。而して實際に於てはかゝる僅少の損失では無くこれに、數倍した損失を知らず識らずにして居るのである。

この他合理的に調味されて居らぬために、不用なる食料を多く要するは、識者の夙に唱道する處、こゝに余の如き門外漢の語るべきでないけれども、少しく調理の方法を知つて居たなら、この不利を未前に防ぐことが出來るであらう。

それから特に注意すべきは、自家の收穫品を使用するに殆ど其價値を認めざるが如き風習のあることである。

この風習は農家の朴質を語り、悠長を示すもので半旬から見ると洵に美風であるかも知らぬけれども經濟志想の未だ發達せぬ遺風で今日の如き生存競爭の激甚に處するには甚だしい誤まれる思想である。如何に現金を支出せぬものとは云ひ、販賣すれば直ちに現金と換るべきものであるからこれは、價を定めて使用するがよい、この風習は夥しく今日の農家の生活費價値を高める、誤まれる風習であるから、例へ一ケの甘藷、一本の葱を使用するに際しても價なる用意を忘れてはならぬ。これ蓄積中の最大要件である。

生産費價値を低廉ならしむること。

生活費價値を低下すると共に、生産價費値を定むることが肝要である。前者は消極的蓄積法で、これは積極的蓄積法である。

生産費價値とは如何なるものかといふに、これ生活費價値と同樣生産に要する一切の費用を計算して、これに一定の利益を加算した價格を云ふのである。

抑も今日我國農家の實狀を見るに、殆ど生産費價値を念頭に措いて作業に從事するもの何人ありやだ。甚だ慨歎の至りに堪えぬ次第である。生産費價値を定めぬ栽培物に價値のある道理はない。生産費價値を定めてあらぬからこそ農家は其收穫物の販賣に際して何等

の定見なく、奸商の言のまゝに易々諾々、命これ隨ふの悲慘事を敢てせねばならぬのである。

こゝに於て余は實際勞力を以て農業に從事する人々に向つてこの生産費價値を定めて、收穫物を販出し、更らに一歩を進めてこの生産費價値を低廉にして、其差額だけの利益を上げることを切望するで其生産費價値を低廉にするには如何にするかと言ふに、

一、集約的栽培をなすこと。

一、手間肥料を使用すること。

一、合理的栽培をなすこと。

である。左にこれ等に付いて具體的の意見を述べて參考に供すると

しよう。併しこゝに斷つて置くがこれは決して机上の空論から記述したものではない。曾つて余が田舍に奉職中、實地に經驗せることを、ありのまゝに公開した實驗談である。

集約栽培をせよ。

敢て中農階級の人々に限つたものではない。一般に農家は土地の集約をせねば利益は大なるものでない。

集約栽培とは土地を集約して作物を栽培することをいふのである例へば從來の一毛濕田を變じて二毛作、三毛作をなすとか、畑地に於て從來は麥作の跡地に茄子を栽培するとか、甘藷を栽培するとかせるに對し、小松菜を間作し、次で蓮華草を間作し、第四毛作とし

て、夏大根を栽培するといふ樣に、同一の圃地を、三重、四重に活用する栽培の方法をいふのである。

我國の農業は近時著しく進歩して來たので、從來の如き空時（何の栽培物もない時期）が無くなつて來たけれども、未だ充分ではない。東京とか大阪とかいふ大都市の附近に於て集約的栽培は盛んであるけれども、我國一般の農家から見ると、まだ〳〵集約栽培は實行されてゐない樣であるが、苟も農業によりて多大の收益を上げようとなれば、集約栽培を實行せねば駄目である。

集約栽培の利益は、

一、土地を幾重にも利用することを得。

一、短期間にて利益を收め得。

一、比較的高價に販出し得。

といふ利益があり、一反歩乃至二反歩の畑地にて優に五六反歩乃至七八反歩に相當る收利を得ることが容易である。

次にこの集約栽培に一歩を進めて、左記の如き農業を經營すれば一層利益を增大し得るものである。

一、促成栽培。

一、早熟栽培。

一、抑制栽培。

一、軟化栽培。

促成栽培は近年漸く盛大になつて來たけれども、集約栽培同樣まだ〳〵これが實行者は曉天の星の如き感がある。尤も促成栽培と言ひ、早熟栽培と言ひ、抑制、軟化等の栽培も總べてこれ集約栽培の最も進歩した一農業であるのだから、集約栽培と區別すべきものでないけれども余は便宜上こゝに區別したのであつて、決して其異なれるものではないのである。

促成栽培は從來我國に於ても行はれて來た、靜岡縣三保地方では德川家康の時代から實行されて居る江戸時代になつては附近の農村殊に砂村、葛西村等では盛んに實行して來たのであるが、明治維新後は歐洲の進歩せる方法を以て一層盛大に栽培される樣になつたけ

れども、これとて一部分の農家に於てのみで一般農家は未だ促成栽培の何たるかをさい知らぬものが少くない。促成栽培の一種であつて、早熟栽培と稱する方法は促成栽培の如き特殊の技倆も要らず、費用を要することなくして、甚だ有利なるものとされてゐる。尤も早熟栽培は温暖なる土地でなくては不可能であるから一般の農家に向つてこれを奬勵することは出來ぬけれども、栽培物の如何によつては稍々寒冷なる地方でも出來得ぬとは限らぬものである。

もしそれ抑制栽培、軟化栽培等に至つては寒暖何れの土地に於ても容易に栽培の出來るもので其收益の如きも前者に決して劣らぬものである。

尚未知の人々の爲めに附言して置くが、

促成栽培とは、木框又は其他の繞圍物を以て一區劃を作りこれに釀熱材料を用ひて發熱せしめ、不時に蔬菜を栽培する方法をいふのである。即ち一二月の交に胡瓜を販出するとか、二三月の候に茄子南瓜等を販出するが如き栽培の方法をいふのである。而してこの方法には、

一、木框栽培によるもの、

一、温室栽培によるもの、

一、其他の繞物圍によるもの、

があり、釀熱材料として、

一、化學熱利用（物質腐熟の際に生ずる酸酵熱）

一、温泉利用、

等が重なるものである。

早熟栽培とは温暖なる地方に於て、最も簡單なる促成栽培の如き方法を以て覆地栽培より早期に收穫する栽培の方法をいふのである所謂走り野菜の供給をすることである。

抑制栽培とは特に收穫を後らして、成熟せしむる方法で換言すれば、播種期、栽培期等を後らしめる方法である。十一月十二月の交々胡瓜を販出するとか茄子を販出するが如き、或は空豆を栽培するが如き其一例である。

軟化栽培とは、土當歸、蕗、三葉、石勺柏等を最も柔軟に栽培する方法であつて、頗る簡易に、出來得る方法である。

其何れも從來の露地栽培に比して有利なることはこゝに記述する迄もなく、一坪にして二三ヶ月間に十圓位の收入を得ることは容易なることである。詳細は拙著『走りと晩生の蔬菜栽培法、定價壹圓參拾錢送料八錢、廣文堂發行に就て見られたい。詳細に懇切に書いて一讀直ちに着手出來る樣に出來てゐる。(御注文は典隆堂に申込めば直ちに發送する)

手間肥料を使用せよ。

製産費價値を低廉にせしむる第二の要素としては、低廉なる肥料

を施用することである。如何に集約栽培等をなして土地の生産費價値を低下せしめても、肥料にして高價であつたなら、其利益は半ば減殺されるものであることは今更らこゝに言ふまでもないことである。

現今農家に於て最も苦痛なりとされて居るものは、肥料の高騰なることにあるけれども、これ蓋し肥料その物が高價であるのではなく、農家自らが高價なるべきを希ふて居るではないかの感じがある。

そこで余は肥料の購入法に付いて

一、手間肥料を施用すること。

二、金肥を使用する場合には、配合肥料等を使用せざること。

の二點に注意を促して置きたい。

我國の肥料界は明治年代に於て一大進歩をせると同時に、一大退歩をして居る。即ち金肥の施用旺盛なると同時に手間肥料の閑却されたことがそれである。

我國從來の肥料は其大部分は手間肥料であつて、金肥の施用の如きは甚だ僅少なるものであつた。金肥と稱するも從來は其數は甚だ少なく、化學肥料の如きは明治以降の產物で、大抵は魚類のみであつたのである。であるから、信濃、甲斐等の如き山間僻遠の地は勿論少しく交通の不便なる土地では其施用が出來なかつたので、殆ど

全く金肥の存在を認めぬ程であつたであるから、手間肥料のみを以て培栽して居たから、隨がつて田畑共に有機質の多量なる肥沃の土地となつて居たのであつたが、明治以降、交通運輸の便開くると共に低廉なる運賃を以て自由に金肥の輸入が出來、且つは養蠶等の事業が發達したために、手間肥料を作製する勞力を惜む樣な傾向となつて、金肥の施用が著しく增加し、遂には手間肥料のみを以て栽培をする樣に變化したのである。それが爲めに耕地は漸次有機質の缺乏となり、肥沃の地は變じて瘠薄の土地となり收穫を減少するの悲運に到着したのであるが、幸ひにかゝる金肥專用の地方ばかりは無く、今日尙盛んに手間肥料を施用せる地方もあるけれども、それと

て大部分は金肥に仰ぐ傾向である。

金肥即ち化學肥料は肥料として確かに有價値のものではあるけれどもこれに、其大部分を任せて栽培するが如きは農家のとるべき策ではない。金肥多用の結果は、

一、生産費價値を増大せしむ。

二、土地を瘠薄ならしむ、(有機質の缺乏による)

三、肥効を誤り易し。

四、或る種の栽培物に於ては、其特徴たる、色澤、形態、味等を巧損する。

等の缺點を生ずるものである。

故に余は、これ等の缺點なき手間肥料を多用することを切言したいのである。勿論、從來の如き不合理なる肥料の調製法は宜しくない。最も合理的に調製して肥効の大なるものでなくては駄目であるから此際手間肥料調製の改良を斷行し、以て生産費價値を低廉ならしむると同時に土地を肥沃にすることを、一刻も早く實行するがよいのである。(詳細は金肥代用新肥料製造法を熟讀するがよい一部二圓五十錢、送料十二錢、典隆堂に於て取次販賣をなす)

合理的栽培をせよ。

我國の農家は祖先の遺風を傳承するに過ぎぬ、毫も最近の學理的農業に基いて居らぬらしい。尤も農學校を卒業してとかたいしは農

業上の新智識を習得したとかいふものは例外であるが、一般の農業者はともすれば、學理的農業を排斥して、舊慣を墨守せんとする傾向がある。これ決して余の偏見ではない。事實に於てかゝる傾向がある。而かもそれが因習の久しき容易に脱却されて居ぬ樣である。

由來農家の現狀を洞察するに、新らしい學說、新らしい人の行ふべきことである。

有利なる作物の選定。

一口に穀菽蔬菜といふけれども、栽培物の種類は夥多なるもので收穫の多寡、利益の大小、千差萬別である。特に氣候、土壤、土地の精況等により其利益は種々樣々で所詮一定することは出來ない。

が併し少しく思ひを栽培物の上に致したなら、其何れが有利なるや何れが薄利なりや位のことは容易に分明する筈である。然るに舊慣を墨守して讓らざる農家はこれを改革しようとは思はぬ。そして祖先以來の栽培物のみを栽培して他にこれを有利栽培に換へようとはしてゐぬらしい。收穫の比較寡く、價額の低廉なる作物を栽培しつゝ、半面に高價なるものを購入するが如き其一例である。

著者が先年、千葉縣香取郡に旅行した時のことである。この地方は利根川沿岸で冲積會の地に屬し、大根の栽培に最も有利なるに係らず、これを栽培せず、却つて薄利なる甘藷（其當時は今日の如く、甘藷が高價でなく、頗る低廉なるものであつた）を栽培し、それさ

い販出することはなくて自家用となし(間食)殆ど無價値に終らしめ浮島大根(茨城縣稻敷郡に屬し、霞ヶ浦中の孤島である)なるものを高價に買入れて、澤庵及び、煮食用に供するを見て、其不利なることを力説すると、某人の曰く、

栽培などは恰も腫物に觸るゝが如き感を有して、危險視して居る樣である。これ謬見も甚だしい。今少し學理的に從事して貰いたいと思ふ。

例へば酸性土に對して、蓮華草とか、小蕪とかいふものを按配して收穫の薄きを蓮華草、小蕪等其物の收穫薄きものなると早合點するとか或るかゝる土性の地に硝酸アンモニヤ等の速効肥料を施用す

るとか等の如き、其一例である。元來蓮華草とか小蕪とかいふものは酸性土に對して最も抵抗力の薄弱なるものである。この薄弱なる抵抗力のものを栽培して多收穫を得る理由はなく、又硝酸アンモニアの如き酸性肥料を施用すれば、アンモニア分は作物に吸吸されるとも、硝酸分は土地に累積して益々土壤を酸性化せしむるものである。かゝることは農業書の一冊も農閑時に讀破すれば容易に分明しる。又其土壤が酸性なるや中性なるや、アルカリ性なるや等は、僅かに拾錢に滿たざる金錢で數分間に分明するものなるにも係らず、これを實行しようともせず、只徒らに祖先の遺風を傳承して居るなどは寧ろ滑稽と言ふべきである。

以上はほんの一例を示したに過ぎぬがかゝる不合理なる例を列擧したなら、殆ど際限はあるまい、苟も農業によりて利益を増大し、金を溜め樣と　なら、かゝる不合理なる栽培は止めて、合理的栽培をするがよい。不合理なる農業をするものは金の欲しくない、貧乏で暮したい人、即ち栽培の方法を知らぬので遂面倒だから、作らないのです。

とは哀れな話ではないか。これでは農業者としての資格は零である。何故なれば今少し農業に對して眞劍な、眞面目な考へを持たぬであらう。

亦先年余が靜岡縣田方郡に旅行した時のことである。或る篤農家

に一泊した、田方郡は人も知る豆の名産地で其品質と言ひ、收穫と言ひ共に優良なるもので、利益も隨がつて多大であるにも係らず、この家では豆を一坪も栽培して居らぬので其故を問ふと主人は「祖先以來の緣喜で作らぬことになつて居ますが別に不自由はありません」とのことであつた。勿論金を以て購へば、栽培せずとも不自由のある筈はないけれども、土地に適した有利なる栽培品のあるにも係らず、緣喜だといふてこれを斥け、薄利の栽培物をするに於ては驚かざるを得ない次第である。これ即ち金の溜らぬ緣喜で、甚だ以て宜しくない椽喜といふべきであらう。かゝる類例は世間に夥しい。

余は切言する、苟も農業によつて人並以上に金を溜め樣となれば常に世界の大局に着目し、時世の進運に伴ひ、氣候、土壤、土地の情況に應じ有利なる種類を選定して栽培せんことを。

社界の風潮に留意せよ。

社會の風潮に留意し、時世の進運に伴ふた農業をしなくては利益は增大されぬ、であるから世界の大局に着眼して例へ一厘一毛でも利益の大なるを選定する必要がある譯である。

而してこれと同時に時代の要求に適當したるものを栽培することが亦金を溜めることの必須條件である。

余曾つて大正四年、歐洲の戰亂突發するや、獨逸の現狀に鑑み二

三年の間に所詮戰爭の終局せざるを、豫知し、藥草栽培の有利なるを心中潛かに思ひたれども、未だこれを世に發表するまでに調査せざりしを以て、暫く躊躇し徐ろに調査の歩を進め、大正六年全く其有利なる確信を得て世に發表するや、世人はこれを以て際物と稱し敢て一顧だにするものすら無かつたのである。然れども余は確き信念を以て再三これを力說し、果ては途に自ら單行本さい出版したのであるが、でも世人はこれを以て際物的取扱をしたのである。次いで翌年大正七年の春、更らに緬羊の飼育の有利なるを唱道せるも人多くはこれ又際物として輕蔑の眼を以て視て居たのである。

然るに何ぞ知らん、余が唱道後僅かに一年ならざるに、藥草の栽

培と言ひ、緬羊の飼育といひ、共に國家の急務なりとして政府は補助金をさい交付してこれが奬勵をしたのである。これ余の自家廣告の如くなれども事實は最大の雄辯である。余は決して自家廣告をするものではない。

然るに世人はともすれば、この健實なる唱道に耳を傾けずして、幷尚輩の瀕大なる廣告に眩惑さるるかの感がある。其證據としては健實なる藥品栽培の單行本の世に發行されつゝあるに係らず、殆ど無責任なる、而して非常に高價なる講義錄等を購讀することの多きに於て然るを見る、講義錄を發行せる某氏の談によれば半ケ年にして實に二萬餘の講義錄を發行せりと、而して講義錄たるや驚く勿れ

其内容の杜選なる、而して其責任を重ぜざる殆ど言語に絶するものであつたのである。

これ要するに徒らに廣告に眩惑せるといふのみであつて、眞に農業を理解せざるより起る悲劇であるのである。心すべきことゝいふべしだ。

余は重ねて言ふ農業によつて眞に金を溜め樣となれば、社會の風潮に留意し、時世の進運に伴ひ、眞に理解ある農業を經營されんことを。

購買販賣に關する注意。

悠長と朴質とを看板となし、自給自活、敢へて他との交渉なき生

活を營んだ時代の農民はいざ知らず、苟も今日の如く、事々物々總べて他との交渉を要する農界に於て、從來の如き購買、販賣の方法を以てしては利益は商人に壟斷されて、農家はたゞ糞骨を折つたに過ぎぬことになる。

商人は常に言ふ、「賣り方より買ひ方」と洵に然り商人の利益の存する處は賣方より寧ろ、買方に存するものである。商人は一刻を競ふて機の敏なるを尊として働くけれども、農家はこれに反して悠々自適、武士は喰はねど高楊枝式に呑氣に構へて居るけれども、かゝる狀態では利益のある筈がない。これでは生産費償値も、生活費價値も有つたものでない。

娯樂的農業は例外として、苟も營利を目的とする農業に於ては、商人と同樣、購買、販賣に充分の注意を要すること勿論である。然るに一般農家の現狀を見るに購買、販賣共に悠長の態度を以てこれに望み、自ら商人的氣分となり居るものを見出ださぬ。會々錢厘を爭ふものも無いではないけれども、これとて多くは商人の甘言に籠絡されて有耶無耶に終るものが多い樣である。

こんなことでは農業で利益を得ることは所詮不可能である故に余は言ふ。

商人的氣分たれ。

と。かくしてこそ初めて、農業の利益はあるものである。

土地の情況。

次ぎに農業は土地の情況に依つて各異つた方法をとらねばならない。即ち交通、運輸の便否、都市附近、僻遠の地、氣候、土質、生活狀態等によつて大なる差異の生ずべきものである。例へば近年頗る流行して居る苺の栽培の如き、坪數圓の收益を上ぐること決して至難のことではないけれどもさりとて、何處でも栽培に適するとは限らぬ、運輸の至便なる土地又は都市近郊でなくては、所詮利益のあるものではなく、遲くも株取後拾時間以内に目的の販賣地に到着する土地でなくてはならぬのである。其他三葉、白菜の如き、僻遠の地に於に栽培しては有利なる計算はとれない、高價なる運賃と

販出に要する大なる時間とは所詮都市近郊産のものと競爭の出來得ぬからである。然るに南瓜とか、冬瓜の如きものになると如何に僻遠の地でも其土質、氣候に適して居れば品質優良のものを產出することが出來るので、所謂「本場物」と稱賛されて市場の歡迎を受くるものである。

尙時代の推移と共に其要求するものも同一でなくなるから、需要者の生活狀態に應じたものを栽培する必要もある。最近促成蔬菜として南瓜、冬瓜等の甚だ高價に販賣さるゝのも一に生活狀態に基因するもので、一ヶ拾數圓を惜まず、マクマメロンの賣れ行きの飛ぶが如きも、國民生活向上の結果に外ならぬのである。

右の如き次第であるから金持になるには、なんでもかでも、人の眞似ばかりして居ては駄目である。時に應じ機に望み、充分なる注意と用意とがなくてはならぬのである。

俸給生活者の蓄財法。

半期に數萬の分配を受ける會社の重役も、不眠不休で一ケ月間働いて僅かに三四十圓の月給の巡査も共に同じく俸給生活者であるから、一概に言ふことは出來ないけれども、要するに俸給生活者は農家等の如く其收入が不定のものでないから、個人個人より見れば極めて簡易に生活の基準を定めることが出來る筈である。

而して余の俸給生活者に向つて蓄積法を述ぶるは其收入に應じて

次の一を選ばれんことである。

一、簡易生活。

一、安價生活。

簡易生活も、安價生活も共に、生活費用を節約せるもので、費用を輕減する意味に於ては少しも異なる處はないけれども、其方法に至つては甚だしい相違のあるものである。即ち簡易生活とは生活に要する一切のものを、充分に不足なく用意して簡易なる生活を營む

ものを言ふので、安價生活とは品位を下して、安價なる生活を營む

のである。

其收入金額の如何を問はず、俸給生活者は、この二者の何れかを選ばなくては人並以上に金は溜らぬものである。尤も現今の物價に於ては月給四五十圓のものに、現在以上安價生活をするようとは甚だ無理な注文であるかも知れないけれども、無理を無理と放棄して置いては金は溜らないのであるから止を得ない。

我國は從來非常に生活し易い國であつたが、近年はこれと正反對に非常に生活に困難なる國と變つた。これ諸物價の騰貴せるに反して、收入のこれに伴はないからである。殊に俸給生活者に於て其然るを見る。由來米國は物價の不廉なる國と稱されて居たけれども、

今日では我國の物價と左程の相違がない。併し米國の俸給生活者は收入が多いから、不自由を感じてゐない。勞働者でも一日數弗の勞賃を得て居るから、我國の勞働者に比して甚だしい相違がある。然るに我國では諸物價が著しい騰貴をしたに係らず、俸給は僅かに一倍か二倍位しか增額されて居らぬ。これでは俸給生活者は營養不良に陷らねばならなくなる。

最近勞働問題とか、增俸問題とかいふものが大分世間を賑はして同盟罷業とか、怠業といふものが一つの流行をなして居るがこれ强ち惡いことではない。吾々が或る仕事をするには、一定の生活費用を要するのであるから、其一定の生活費用を根柢として、賃金を定

め、これ應じなかつたなら、同盟罷業をやるといふのは、相當の要求である。併しこれは外に向つてすべきことで一家内でこんなことをすることは出來ない。同盟罷業をせねばならぬ程、生活の根柢に不安を生じて來て居るのであるから、内部は現在より以上に、節約をして、なるべく早くこの困難から脱出することを心懸けねばならぬのである。

そこで余が今日俸給生活者の狀態を觀察するに、不幸にして日々の生活に對する注意が不足しては居まいかとの感がある。今日百圓以下の月給を取つて居るものは、先づ貧民と稱すべきものであらう然るにこれ等の人々が往々にして富豪同樣の生活をして居る場合が

あるからである。否な富豪以上の贅澤をして居るものすら有る樣である。こんなことでは所詮、金は溜らぬ處か、借金が出來る計りである。これ要するに生活を直接司どる主婦の心懸けがよくないのである。

例へば日々の惣菜を購入するにしても、御用聞きの來るを待つてこれに命ずるが如き不經濟の最上なるものである。自分で八百屋なり、魚屋なりに出かけて行つて買へば品質のよいものを二割も三割も安く買ふことが出來るにも係らず。これをせぬなどは困難なる生活を一層困難ならしむるものである。著者の友人に面白い對照の二夫婦が有るから記して參考に供しよう。併し友人に敬意を表して其

名は秘し、甲と乙として置く。

甲は三年前に新妻を迎へたもので現在の月收（賞與金共）平均二百五十圓で乙は昨年の春、結婚したのであるが、月收（賞與金共）二百圓平均である。而して家族は甲乙共夫婦きりで、甲には一人の下女が居るが乙には親戚から托された十四五の中學生が寄食して居る。而して甲の妻は高等女學校卒業後、家事、裁縫、料理などの學問や、其他女子一般の教育を二三の學校で修得した、現在に於てはまづ、申分のない學力のある奥様であるに反して、乙の妻は小學校を卒業したのみで家事などゝいふ學問は頓と知らぬ。たゞ母の膝下にあつて實地の習練を經て居るだけである。

處でこの兩家庭の狀況が面白い。甲の家庭では

一、臺所は主として下女がする、

一、蔬菜、魚類、酒醤油一切御用聞きに命ずる、

一、一週に一回宛夫君御同伴で何處か料理屋に上つて御馳走を受ける。

といふことになつて居るが乙の家庭では、

一、妻が買物に行く。止むを得なければ中學生を出す樣のことはない。

一、一切通帳を用ひず、現金主義である。

一、食卓には異つた食品必ず十種以上を出す。

といふことに木文律で極つて居るらしい。そして乙の家には甲の家に見ることの出來ぬ、「からし漬」「紫蘇の實漬、」ひしほなどの鹽漬品が何時もある、佃煮の五六種類位ない時はない。

この二家庭の毎月の生活費（臺所のみ）を聞くに甲は六十圓、乙は四十圓以内であるとのことである。而して日常何れが品質の優良なる食料をとつて居るかといふに乙である。この一事を以てするも如何にこの家庭の合理的なるか〻分る、尚一つ記すべきは甲の臺所には、毎週の献立表（但し實行されてゐる部分は半分位である）が下げてあるが乙の臺所にはない。甲の家庭には、家事經濟に關する立派な帳簿が四五冊あつて妻君自ら筆を把つて記されてあるが、乙

の家には金錢出入帳が一冊あるきりである。

俸給生活者の家庭に於て一々帳簿を作つてこれを記入して置かねば分らぬ樣では主婦として餘りに注意が足りない、毎月の費用は殆ど同じものである。正月と、七月とは少しく違ふか知れぬがこれとて一度經驗して見れば分つて居る筈である。金錢出納帳の一冊もあればそれで充分で其他のものは必要がないと思ふつまらぬ記帳をして居るより其間に、八百屋にでも行くとか、魚屋へでも行つて新鮮なものを安價に買ふ工夫をするのが主婦として最上の良策である。

要するに月給生活者の家庭にあつては（生活に困難ならざる收入ある場合）この乙の家庭に於けるが如き簡易生活を營むが金を溜め

ることの秘法である。

月收四五十圓位の家庭にあつては、更らに一歩を進めて或る程度迄は安價生活をする必要がある。

勞働生活者の蓄財法

勞働生活といふても千差萬別で際限がない。資本家でない生活者は廣い意味に於て皆勞働者である。精神上の勞働者、筋肉勞働者などの區別はあるが、兎に角こゝには、筋肉による勞働者に付いて述べよう。

筋肉勞働を營む人々は月俸生活者に比して、現今有利なる位置にある。即ち

一、外見を裝ふ必要がない。

一、比較的交際費が少ない。

一、安價生活をなすに便宜である。

が、筋肉勞働の中にも月收、數百圓に上るものは近時決して少くない。から強いて安價生活に這入る必要はないけれども、金を溜めるといふ目的であるなれば、なるべく多くを費用せぬ方法を選ぶがよい。

見榮を去れよ。

まづ筋肉勞働に從事してゐる間はこの見榮を去ることが最もよい夫が外に出て毎日眞黑になつて働いてゐるのに嬶は家の中で立膝長

烟管、近所の同類共を集めて、薩摩芋を噛りながらの夫評定などは甚だ以てよくない。著者はかゝる生活を曾つて勞働時代に毎日見て居たが、實に可哀相でならなかつた。併し田舍の生活にはこんなことは無いから無事だが、それに反して兎角見榮を張る傾向がある著者が先年千葉縣の銚子へ暫く滯在して居た時のこと毎日前を通る主婦風の派出な女と、茶屋女風の十八九の娘があつた。それが漁師町のことゝて、一際目立つて見えるあるとき宿の女中にきくと。主婦風の女は「六さん」といふ大工さんのお主婦で毎日御化粧が商賣で近所を遊であるいて居るが、「六さん」の腕がよいので何不自由なく暮して居るがほんとに羨しい身分だ、もとは近所の茶屋に奉公し

て居たのだが、機織の上手な人ですとのことであつた。で家で機を織つて居るかと聞くと、そんなことは致しません內職なんかしなくても「六さん」の腕では二人位贅澤に暮せますものといふ恐ろしい返答であつた。尙殘の一人は、左官の親分の娘さんだが、親分が近頃病氣なので少し困つて居る樣ですが。でも俄に服裝をくずすことも出來ないでせうとのこと。

余は熟々これ等の人々の行末を考へた。何故なれば、少しく眞面目な生活が出來ないであらう、「六さんの」お主婦さんも內職に機織でもしたなら、一家の收入は益々增加して眞から人に羨まれる身分になるであらう。夫の手一つを生命の綱と頼んで小さな滿足に滿足

して居るなんて何といふ淺墓な考への人だらうと、今日は幸ひ「六さん」が無事で働いて呉れるからよい樣なものゝ、もし左官の親分さんの樣になつたなら、什麼するだらう。其時になつては間に合はないだらう。親分の娘さんもそうだ、父が元氣よく稼いで居て呉れた時代には、父が着せてくれる着物を嬉んで着るもよいが。今、父が病褥に伏して其日の生活にも困憊するといふのに、何故なれば、あの漁師町に不似合な着物を脱ぎ捨てゝ生計の手助けをする氣にならぬだらうと、見榮を去れよ、見榮を、見榮、虚榮の心が有つては金は溜らぬ金を溜めるならまづ見榮を去るがよい。

天引生活。

毎日毎日と日錢の這入る勞働者に於ては天引生活なるものが肝要である。

天引生活とは、一圓なり、二圓なり、夕暮れ持ち歸つた日當の内から二割とか三割とか毎日額を定めて置いて天引して、其餘を生活費にあてるのである。而してかゝる收入の家庭に於ては、天引を二口となし、次の樣に差引くがよい。

一、全額の二割乃至三割（收入の程度によつて定めるがよいが、如何に少收入でも必ず天引すべきものである。

この天引金は或る豫定の金額に達し、豫定の利殖法を講じ得るまで絶對に引出さぬ。

二、一の天引の殘額の中より、生活に應じ、必要なりと思考するたけの金額を差引く。

（イ）醫藥料

（ロ）不時災難の用意。

（ハ）盆、暮、正月等の費用。

（ニ）被服料其他小兒等の不時費用。

（ホ）保險料、（簡易保險が便利である、但し利殖上からは損である）

（ヘ）月末支拂の用意。（電燈料、町内の費用、其他月末集金のもの）

（イ）より（ヘ）までの費用として日々別々に貯蓄して置く必要がある。

而してこの貯金は漫然と簞笥や、財布の中に入れて置いては駄目である。如何に意志の堅固な人でも、時によると少しは使用したくなるものである『もし一度でも使用する樣のことがあると、それが慢性になつて、「宜いや明日これだけ餘分に入れて置けば」などゝまた使ひたくなるが人情である。そうなつては最早や貯金は崩れ初めたのであるから最後實行は六ヶ敷い。そこで容易に使用出來ぬ樣に便宜郵便局なり、銀行なりに貯蓄するがよい、またもし出來得れば前掲の宮本長者が預けた樣に取極めて置くも一方法である。

重ねて言ふて置く、收入の僅少なる生活者が貯蓄するには一通りや二通の苦心で出來るものではないのであるから、算筒や財布で貯金を間に合せては、所詮駄目である。

不定收入者の貯財法。

不定收入者とは、收入の不同にして一定せぬ職業にあるものを指していふたのである。即ち、醫師、辯護士、商人等を初めとして、其日其日の勞務に服するも、其收入一定せぬ各職業の人をいふのである。

著者は曾つて、某醫師夫人に付いて其蓄財法を質したことがある夫人は蓄財に頗る妙を得た方で大に世の模範となるものが多いから

其談話を綱目體に列擧して置かう。（某醫師夫人談）

一、毎月一日より五日迄は前月收入金の一日平均金額の五分の一となして生活す。

一、六日より月末までは一日より五日までの一日平均金額の五分の一とす。

一、收入の多き月は少なき月に比して比較的高等なる生活を營み得るも、其額前月の平均額の五割以上を餘す時は貯金に繰入る。

一、收入の多き月は病者の多き月なれば特に衛生上に注意を要するを以て生活の向上を計ることゝしてゐる。

一、月末、二期拂、年末拂等の收入金は以上の計算に算入せず。

一、以上の費用は日々の臺所費用及び不時支出金とである。

一、日々の臺所費用とし計算する料目は。

米代

魚代、總菜代

小兒の小遣金、學用品代

其他の日々の支出金

二、日々の支出金の殘額は、

（イ）生命保險

（ロ）良夫の修養費

（ハ）小兒將來の學資金

（ニ）學資償却として兩親に送る金（年末）

（ホ）不時災難用の準備金。

（ヘ）將來の發展に處する基本金。

（ト）年末拂、二期拂の準備金。

の七種に分つて貯蓄して置く。而して、（ハ）、（ヘ）の二種は健實なる會社の株式を以てこれに充當し、（ニ）（ホ）（ハ）は銀行貯金、（ホ）は別に貯金として他に預金せぬことにして居る。

著者の知れる俥夫の妻の蓄財法。

俥夫の妻は著者の郷里の生れである。幼時は相當の生活を以て成長し、來たのであつたが、十五六の頃一家破綻して辛酸苦勞した女

である。この女の蓄財法もまた以て世の模範とするに足るから、綱目體に記して參考に供しよう。

一、買物は必ず云ひ價より幾らか引いて貰ふ。そして引いて貰つただけを貯金する。

一、買物は決して一ヶ所でやらない、それは相場をよく知ることが出來ぬからである。

一、夫には自分の副食物と同一のもの以外に必ず。魚類を附ける（夫が魚を好む故）

一、魚は毎日自分の手で漁獲する、附近に霞ヶ浦あり一人や二人分の漁獲は容易である）

一、毎日機織をして、其金は全部貯金する。

一、多忙の頃は農事手間、養蠶手間等に行くが、その手間賃は全部機糸を購入す。（この糸にて機織なして販賣す）

一、鷄を飼養し、卵代は全部貯金となし、鷄糞を肥料として少許の蔬菜畑を耕し、副食物を得。

一、夫の收入金より一日一割五分宛天引して前記の各種と合して貯金す。

かくの如くにして十年一日の如く、倦まず、屈せず、貯蓄した金額は今日既に壹千七百餘圓になつて居る。今日田舍で壹千七百圓の現金があれば俥夫を止めてもよからうと言ふと、二千圓になつたら

止めて商業をする積りだがあと一年餘りで出來るから、その時には自分が主となつて機屋をするといつて居る。田舍の倅夫にして十ケ年に一千七百餘圓を蓄積したとは剛氣なものである。

大黒柱の保存法。

大黒柱とは、一家を支持する主人のことである。(この主人とは收入を得る人を指したのである。戸籍面上の家長の意味ではない)

主人がもし萬一のことが有つた時には、什麼するか。

これは日常最も用意して置くべきことである。萬一のことのあつた爲めに收入の途、絶え一家離散の憂目を見るが如きは世に往々あることであるが、これ日常の心懸けがよくないからのことで、平常

これに處する道を講じて置くが恒産なき人或は恒産の薄き人々の忘るべからざことである。

前述の倅夫の妻が、夫の爲めに特に毎日其好める魚類を食せしめたといふのは、この一家の大黒柱をして、充分勞役に堪え得る樣、強健なる身體を永く持續する樣、病魔に侵されぬ樣、意氣の阻害なき樣の注意である。かくしてこそ一家の大黒柱は永く安泰で居るのである。世には自分の鼻の下ばかり可愛がつて、夫の不在中に團子の横喰ひや、お薩の丸燒きなどを喰べて知らぬ風をしてゐるものがあるけれども、これは甚だ宜しくない。大黒柱の腐らぬ樣、日常相當の滋養分を攝取せしむる樣に心懸くることが肝要である。

一度萬一のことが有つては取り返しがつかぬ。殊に平常身體の頑強なるものは、病氣になると比較的弱いものである。「鬼のかくらん」など稱するが、この鬼の樣に頑健なる人が病氣に罹ると、容易に全快せぬ例が甚だ多い。これは醫學上理由のあることで、日常丈夫だからといふて、營養を不充分にしたり、不攝生のことをしたりしてはならぬ。身體を丈夫にするといふことはたゞに金を溜るといふ意味から計りでなく、何れの方面からも、大切なることである。

不定收入の豫算立法。

一定せぬ收入にあつて豫算を立てることは却々容易のことでないしかし容易でないからといふて豫算なしで生活するのは甚だ危險で

ある。殊に不定の收入者に於て尙更ら然りである。

そこで不定の收入者に於ては一定の貯金の出來るまでは、其日其日の收入の中から、天引貯金をするが最もよい方法である。而して其餘りの金額は、其醫師夫人の如き方法をとるがよい。

左に參考の爲め日給壹圓八拾錢の大工の一ヶ月の豫算表を擧げて見よう。

一、住居　東京

一、家族　三人。

注意、日給壹圓八拾錢であるから、一ヶ月平均五拾四圓になる譯であるが、仕事の都合や、組合の休日等で仕事を休むことがあるので

平均一ヶ月五拾圓と豫定して置かねばならぬ。

一、貯金　拾圓也
一、米代　拾五圓也
一、家賃　八圓五拾錢
一、薪炭料　參圓五拾錢
一、主人小使　四圓也
一、子供貯金　壹圓也
一、惣菜代　七圓五拾錢
一、電燈料　五拾五錢
一、新聞代　六拾錢

一、交際費　貳圓也
一、雜費　參圓也

合計金五拾五圓六拾五錢

である。而して主人の收入以外に妻が、裁縫、洗張り等により得る收入金一ヶ月平均拾貳圓ある。で、これと合計して

收入金　六拾貳圓也
支出金　五拾五圓六拾五錢
差引金　六圓參拾五錢

となる故に、六圓參拾五錢は不時の災害用、被期費用、盆、暮れ等の旦那場への御贈品代として毎月別に貯金となし、前金の拾圓は、

今日の場合絶對に引出さぬことに極めてあるとのこと。

以上は神田田代町に居住して居た某大工の豫算であるが、この金は今積んで約壹千圓に近いとのことである。而してこの豫算以外に旦那場より年二回の贈物や金錢を貰ふので、これは全部ないものとして貯金することにしてあるとのことである。

第四編　増殖の秘法

利殖の種類。

一定の資金が出來たならこれを活用して利殖の方法を講じなくては金は殖いない。

昔は利殖の方法も簡單で、貸金とか土地の買入れとか位のものであつたが、近來は世の進歩と共に利殖の方法も千差萬別、數限りなく多くなつた、これを大別して見ると。

一、郵便貯金
一、銀行預金
一、保險
一、終身保險
一、養老保險
一、傷害保險
一、教育資保險

一、簡易保險

が、普通の利殖法であるが余はこの他に、

一、内職的營業

一、株式、現物等の賣買及び定期米

一、貸金

一、不動産の購入

一、金錢不時活用

等の特別なる利殖の方法を公開したいと思ふ。

郵便貯金法

郵便貯金は確實である。健固である。これで失敗することは斷じ

てないが、その代り利益が最も薄い、で余はこの貯金法には全然賛成が出來ない。曾つてこの貯金に關しては財界の巨人福澤桃介氏が最も痛快に批評を試みたが余も又同感である。今日の如く物價の騰貴、刻一刻に激甚を極め、金の價の漸く低落しつゝある世の中に四分八厘の利子とは實に時代に適應せぬ利殖の方法である。この方法を以てしては、利殖處ではない。毎年損をしなくてはならない。前にも述べた通りこゝに假りに拾圓を五ヶ年間貯金してあつたとすれば、

一金拾貳圓五拾六錢

となつて居る。即ち二割五分六厘の利子が殖んで居るけれども、こ

れを以て五ヶ年前の物價と比較したなら、金の價は什麽であるか、五ヶ年前には拾圓の金があれば、白米は約二斗購入することが出來たが、今日ではどうか、僅かに一斗五升を買ひ得るに過ぎぬ、然れば物價に比較すれば、郵便貯金に於て損失せる金額は（拾圓白米一斗五升代）であるから、差引七圓五拾錢の損失となる勘定である。

今日の如き生活難の世の中に悠長な郵便貯金は、資金の潤澤なるものゝ行ふべきか或は五圓、拾圓となる迄の豫備貯金に使用する外は不利なるものである。併し今日は尙郵便貯金を實行して居るものも少くないから、この貯金による利子の增加率を掲げて參考に供しよう。

但し斷つて置く、十錢、二十錢の零細なる貯金は一定の金融に達する迄この方法によるがよい。又子供の貯金の如きこの方法によるがよい。

一日拾錢宛郵便貯金をすれば、

拾年目　四百六拾四圓七拾五錢

貳拾年目　千貳百七圓四拾六錢

參拾年目　貳千參百九拾四圓四拾參錢

一日五錢づゝの割にて貯金すれば三十年目には、千百九拾七圓貳拾壹錢、一日壹錢づゝなれば、貳百參拾九圓四拾錢となるのである。

尙この利子の積算は郵便局で問合せるとよく敎へて呉れるから附いて聞くがよい。

銀行預金

銀行貯金は大體に於て郵便貯金と同じことであるが、其相違の點を掲げると、

利子の歩合に相違がある。

といふことになるのだが郵便貯金に据置貯金、規約貯金、海外貯金等のある樣に、銀行預金には、

定期預金

當座預金

特別當座預金

据置預金

等の別がある。而して据置貯金はどの銀行でも取扱ふとは限らない今日据置預金を取扱ふ有名なる、堅實なる銀行は臺灣銀行であらう。

それから銀行預金は、大抵壹錢以上何程でも取扱ふものであるが郵便貯金は一口拾錢以上、壹千圓以下と規定されてある。

定期預金

大抵六ヶ月以上期を定めて据置く預金である（銀行によりてこの期間は少しの等差はある）この預金は利子が他の預金に比して最も

多いものである。勿論銀行により、又時により異なるから一定は出來ないが六錢九錢八錢位と思つたら間違はない。

當座預金

これは出入頻繁なる人のやる預金法で、利殖を目的とした預金ではない。利子は比較的低廉なるもので、日歩計算になつて居る、これも銀行によつて一定出來ぬけれども大抵六厘乃至一錢二厘迄位である。この預金の目的は現金を手元に置かず、幾分なりとも利子を附しつゝ、安全に保管せしむる爲めである。小切手の發行の出來るのはこの預金である。

特別當座預金

この預金は一口大抵五圓以上と定められてある。利子は日歩計算であるが、當座預金に比して高率であるもので、銀行により違ふけれども、日歩一錢以上二錢位である。

据置預金

この方法は普通一般の、銀行では行つてゐないから、土地によつては望むことの出來ぬものである其大體の狀態は郵便の据置貯金と異る處はない。子供の教育基金とか、徴兵費用とか女子なれば嫁入費用とかに行ふてよいものである。

この外銀行の預金には種々あるが、要するに都會生活者は至便であるが、一般農家に於ては不便の點も少なくあるまい。

さて次ぎに余の銀行預金法に付いて述べよう。

第五編　預　金

銀行預金に付いては一通り述べたが、これより著者の銀行預金に關する秘法を公開しよう。

一、銀行預金は五年、十年と長年月の定期とするな。

一、強く出ろ、強く出るな。

一、大銀行より中銀行を選べ。但し小銀行は危險である。

一、信用ある銀行を選べ。

この四ヶ條が著者の秘法である。一讀すると尚に平凡の樣だが、

さてなか〳〵そうでない。

まづ第一項から述べよう。

定期預金は利子の高率なる意味に於て最も有利であるけれども著者はこれを欲しない、イザ大金儲けといふ、突嗟の場合に間に合はぬからである。銀行の定期預金をして利殖をする程、著者は悠長な生活をして居ないからである。故に著者は特別當座預金にすることを第一の要義として置く。

一、強く出ろ、弱く出るな。

銀行は營利會社である。而して其預金者は顧客中の最も大切なるものである。預金者が無くては銀行は營業が出來ない。そこで表面

の規約は規約として、利子は特別の協定をするがよい。特別當座で日歩一錢五厘の銀行でも協定によつては一錢八厘、二錢と利を附するものである。窓口に遠慮して事務員の言ふがまゝに預金する樣では利益は薄い。日歩で三厘を多くすると云へば甚だ少額の樣であるか、假りに壹千圓を一ヶ月間特別當座に置いたと假定すると、

日歩一錢五厘なれば　金四圓五拾錢

同　二錢なれば　金六圓

となり壹圓五拾錢の餘分を得るのである。これを一ヶ年に通算すると其差だけでも、金拾八圓となる譯であるから、別に壹千圓を四ヶ月間預けたと同一となるのである。利殖とはかゝる點に注意すべき

ものである。

一、大銀行より中銀行を選べ。

大銀行は兎角、流融がきかない、かた苦しいものである。利子の協定などに於て殊に然りである。故にことさらに中銀行を選ぶのであるが、さりとて小銀行には危險があるから、これは避けることにして居る。小銀行が高率の利子で預金を引入れる時は少しく危險が伴つて居るものと心得た方が間違がない。

一、信用ある銀行を選べ。

總べて信用のないものは駄目だが、殊に銀行などは、この信用が資本であるのだから、信用ある銀行を選定せぬと思はぬ失態を演ず

ることがある。由來銀行が取りつけなどに遇ふのは信用が無いからである。取り付けを受けては大抵の銀行は根本が歪むものであるから、延ひて預金者の迷惑となるものである。決しい信用のない銀行には預金せぬことに定めて置くべしである。

銀行利用。

銀行はたゞに預金の場所と心得ては、駄目だ、預金は主でない。銀行を利用（少し語弊があるが）して、資本の流通を計ることが利殖家の取るべき第一の銀行策であることをこゝに堅く注意して置く。

保險

近來の保險は從來に比して契約者に頗る有利に改訂されて來た樣

である。

保險には保險金額によりて掛金を割り出す方法と、掛金によりて保險金額を割り出す方法と二法ある。前者は即ち一般保險會社の行なつて居る方法で、後者は遞信省で施行して居る、簡易保險が即ちそれである。

保險に付いては既に一般の人々が周知のことであるから、茲に改めて記す必要はあるまい。もしそれ不明であつたなら、直接會社に一葉の葉書を飛すなら、地方の代理店に問合せると五月蠅程よく敎えて呉れるから、付いて聞くがよい、元來著者はこの保險に對しては一つの意見を持つて居るから、後章これを述べるとして、其

一般方法だけを述べて置かう。

一、終身保險

死なゝければ保險金を受取れぬ方法である。その代り契約の翌日死亡しても契約の金額は受取れるが、生きて居てば契約年限が過ぎても契約金は受取れぬのである。故にこの保險には契約人なるものを定めて置いて其人が受取る樣になつて居る。

養老保險

この保險の契約は終身保險と變りはないが、五年とか十年とか二十年とか期限を定めて置いて其期限内に保險金の拂込が濟めば生きて居ても保險契約金が受取れる方法である。勿論契約の翌日死亡し

ても受取れること終身保險と同樣である。

教育保險

これは子供の成長後の費用として、例へば徴兵の費用とか、教育資金とか、娘の嫁入費用とかの爲めの保險であるから、加入者の年齢は一才から取扱つて居る。受取る年限は大抵二十才位までが普通である。

傷害保險。

不時の災害などで、負傷などせる場合の保險である。我國には餘り盛でないがでも、海外に旅行するとか危險な業務に服するとかの場合にはこれを契約する人もある。

簡易保險。

保險金額は二十圓から二百五十圓迄である。この保險の特徴は、身體檢査を用ひぬといふことにある。掛金は十錢、二十錢と十錢飛びに定められてある。其名の示す通も頗る簡易なる契約方法であるが、利殖上からは馬鹿々々しい樣なものである。詳細は郵使局で問合せると叮嚀に敎えて呉れる。

この他保險には種々の方法があるが。略して左に著者の保險に關する意見を述べよう。

著者の保險に關する意見と利殖法

元來保險といふものは、死を前提としての貯金法といふべきである（嚴格なる意味に於ては、そうは限らぬけれども）故に死といふものが契約期限内に來なくては、利益は薄い、尤も最近五大會社などで行はれてゐる。契約掛金の割戻法などによると、必ずしも不利なるものではないけれども、要するに死に對する準備金といふものである。

貧乏な人とか、利殖の道を講ずることの出來ぬ人とか、死後の生活家族に不安ある人の行ふべき、安全生活の一方法で、利殖の道を講じ得る人、貧乏ならぬ人の契約すべきものではないと余は思ふのである。全部保險を的にしなくては死後家族が困るだらう。遺族が難儀するだらうと思ふようでは未だ其人は利殖の何たるを知らぬの